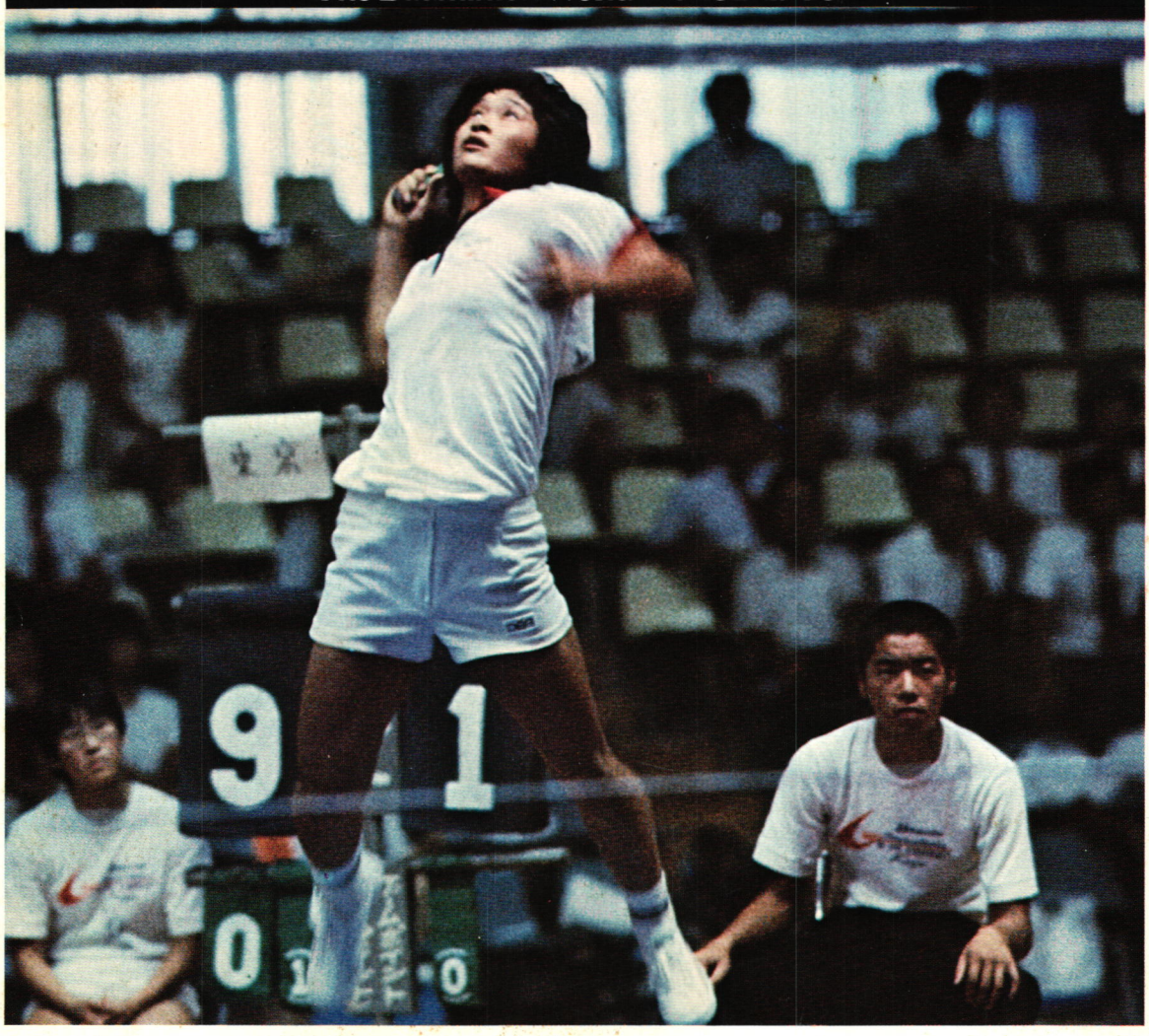
昭和55年10月15日発行（毎月1回15日発行 通巻132号） 昭和55年10月9日第三種郵便物認可

バドミントン 10

The Badminton World No.132 1980





衝撃のシャトル! 今,カールトンから。

常に世界のバドミントンをリードする英国カールトン社が,またもや画期的な発明をやり遂げました。ナイロン・シャトルコック一筋に半世紀,世界のナイロン・シャトル市場で90%以上のシェアを持つカールトンならではの新製品です。研究・開発に5年以上の歳月を費やし,数億円にのぼる開発費を投入して完成されたこの新製品は,従来の水鳥球とほぼ同じ型体と性能を有し,しかも耐久性は3倍～5倍という画期的な製品です。世界的に水鳥球の供給が,問題とされている今日,私達はこの新製品に絶大なる自信を持ち,〝ナイロン・シャトルコック〟と言わずあえて〝ニュー・フェザー・シャトルコック〟と呼びたいと思います。カールトンは常に一歩先を見つめ明日のバドミントンを考えます。ご期待ください。



1ダース¥6,000(1個¥500)

10月下旬発売

METRO 総輸入元 メトロレジャー株式会社 〒101 東京都千代田区外神田5-6-4 TEL.(03)833－3661(代)

第23回全日本社会人バドミントン選手権大会



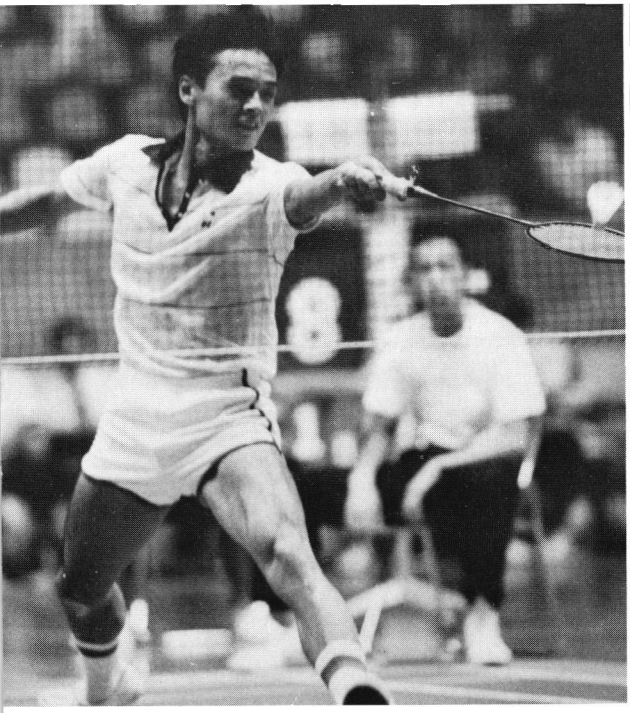
東海林・横山の進境には目を見張るものがある
何よりも集中力が抜群だった銭谷



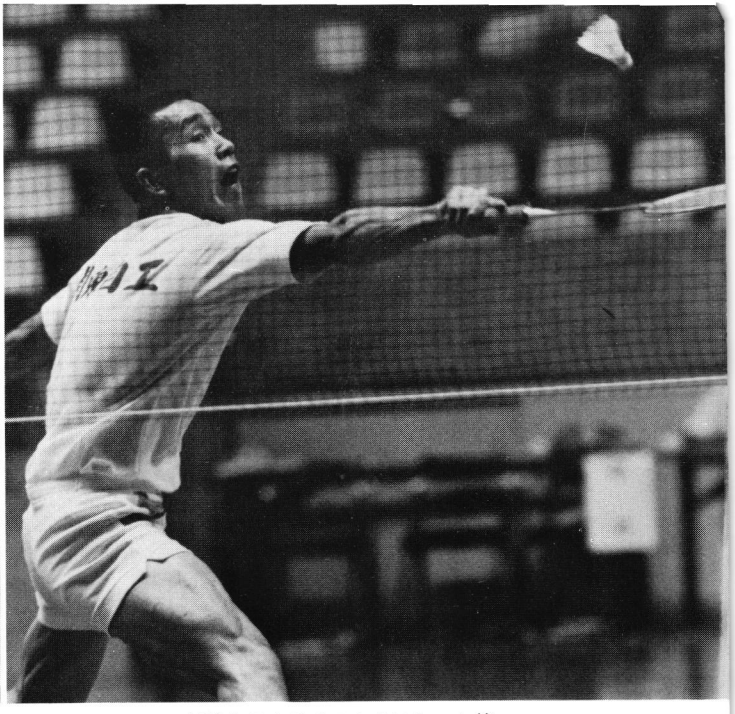
またしても接戦に泣いた田所・土田
久しぶりに豪快なジャンプスマッシュを決めた近藤







次回の奮起を期待したい土田



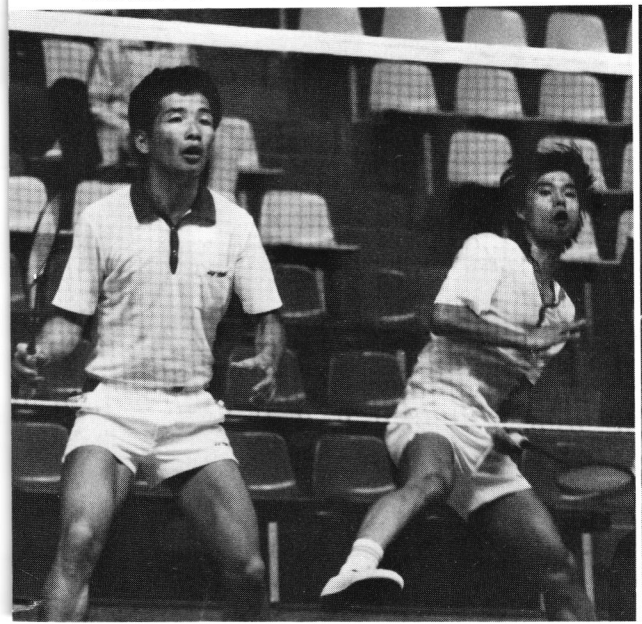
気魂をこめてベスト4に入った管



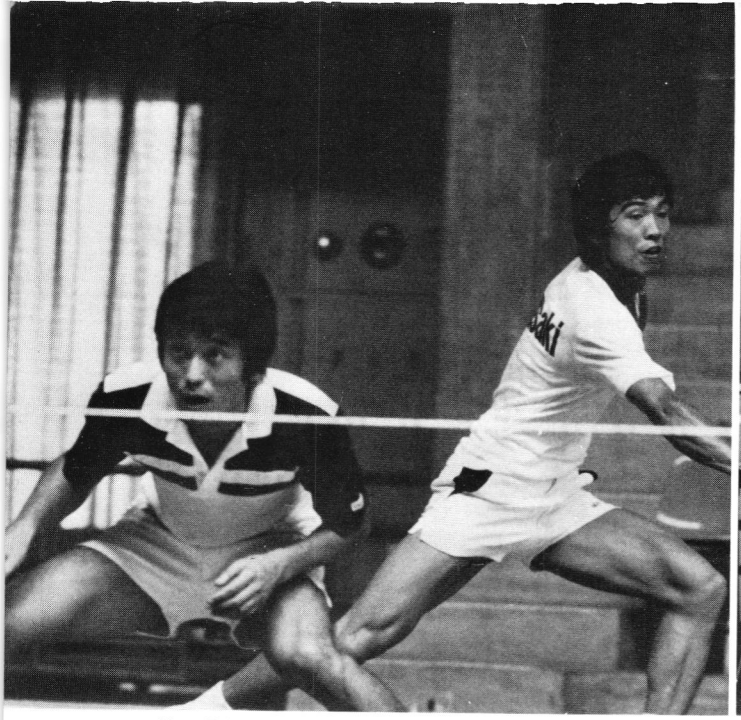
ねばりにねばってベスト4進出の平・河村
栂野尾組と唯一のファイナルゲームを演じた遠藤・池田



攻守にコンビもガッチリの栂野尾・飯野
次はタイトルをねらえる辻・長谷川

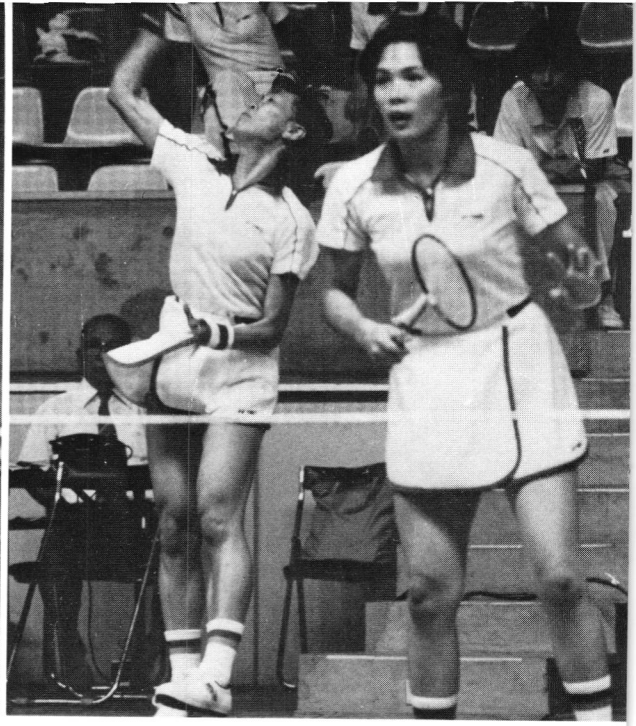






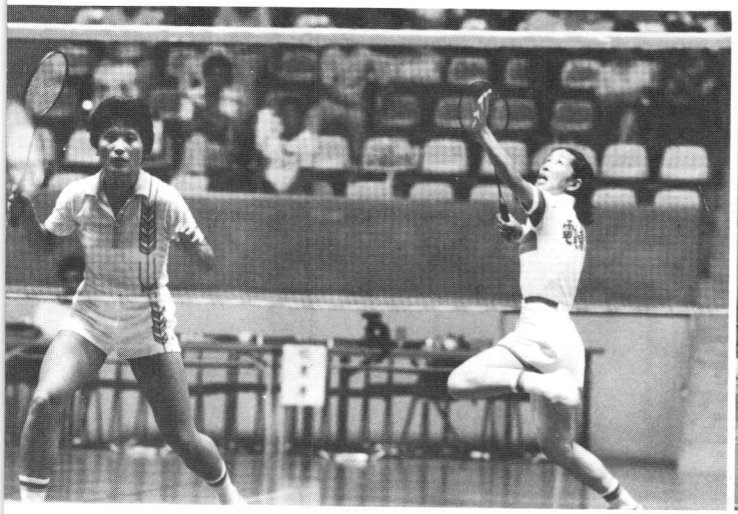
辻・長谷川にマッチポイントを握った銭谷・中井

後半の苦戦を乗り切った徳田・米倉

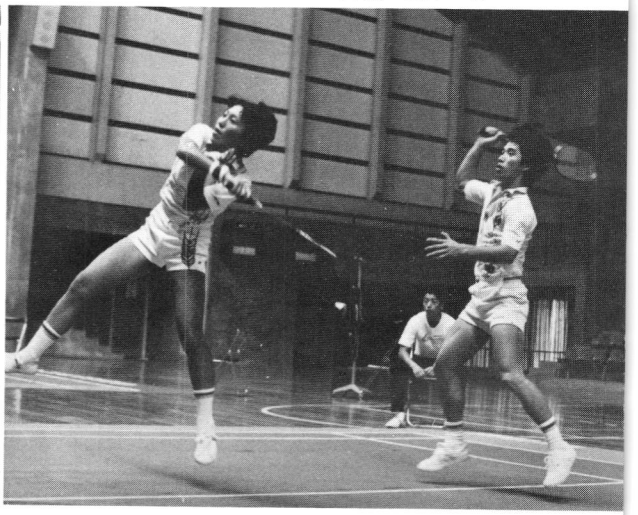


大健闘だったがキメ手を欠いた栂野尾・石田

栂野尾夫妻を破る大殊勲の森下・谷

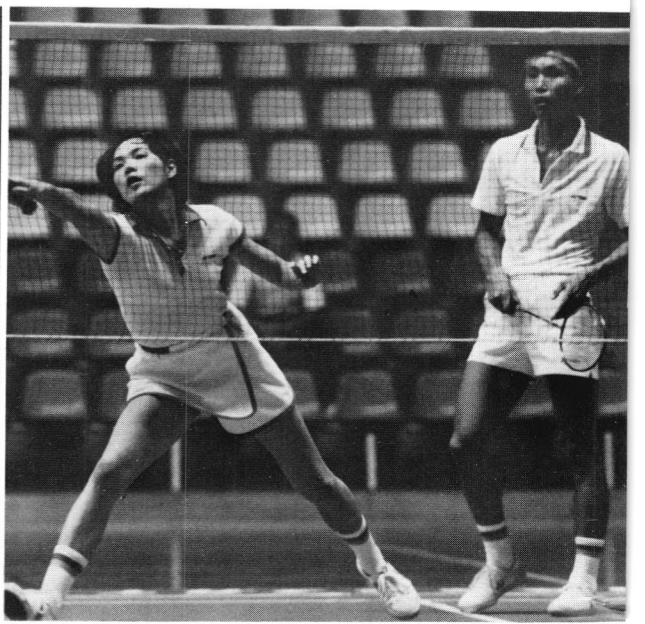


〝絶好調〟だった近藤・高田



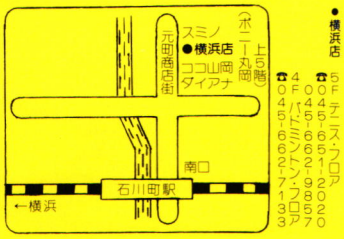
黄金コンビ復活!!　栂野尾夫妻



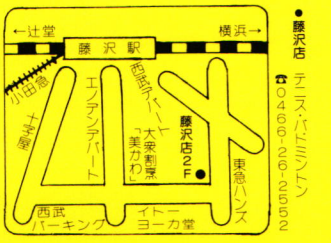


栄光への
アドバイザリー・プロショップ

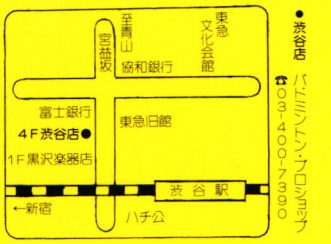
ラケットショップ元町



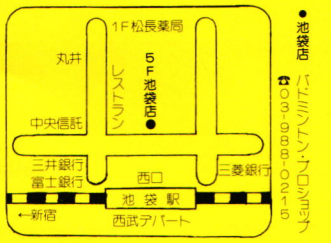
●横浜店
5F テニス・フロア
☎045-651-2020
4F バドミントンフロア
☎045-662-9857



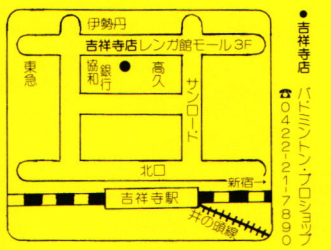
●藤沢店
テニス・バドミントン
☎0466-26-2552



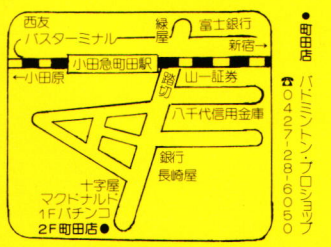
●渋谷店
バドミントンプロショップ
☎03-4007-7890



●池袋店
バドミントン・プロショップ
☎03-3988-0215



●吉祥寺店
バドミントンプロショップ
☎0422-21-7890



●町田店
バドミントン・プロショップ
☎0427-28-6050



バドミントン界 10

❶ グラフ 全日本社会人バドミントン選手権大会から	⑯ 実りあるインドネシアの2週間 本場のトレーニングで汗を流す
❻ 銭谷の強打うなる!! 土田の悲願みのらず	㉖ 初めての合宿で〝鉄の団結〟 シャンティック・バドミントン・クラブ
❽ 近藤のジャンプ・スマッシュさく烈 徳田、湯木に雪辱し2位へ	㉙ 川嶋、北田が二冠王に輝く 700余名のフレッシュマンが大熱戦
❿ 栂野尾・飯野みごとな速攻 辻・長谷川も内容充実	㉚ 新連載／銭谷欽治 チャンピオンをめざせ
⓫ 徳田・米倉ユーバー杯へ曙光 近藤・高田、気合をこめて準優勝	㉜ 第9回ユーバー杯防衛戦へ向けて 「中国遠征強化合宿」で飛躍ねらう
⓬ 森下・谷ミックスを若さで制す 星野、往年のプレーを再現	㉞ 第18回関東バドミントン選手権大会 工藤、宮森に快勝
⓮ バドミントンの虫 長谷川　進	㊳ 現状突破をめざし、はりきる 鶴見女子中学・高等学校
⓯ 〝自分の型〟を求める 管　敏明	㊵ 海外トピックス ユーバー杯地区予選組合せ決まる ほか

◇表紙デザイン・構成，本文カット＝野間デザイン室
◇今月の表紙＝第23回社会人選手権で優勝した近藤小織　　撮影＝赤星三樹

9月14日～19日――――群馬県桐生市

土田の悲願みのらず
長谷川、管は大健闘のベスト4

▼一般男子シングルス5回戦

銭谷（東京）	2	15—5	15—7	0 鈴木（新潟）
米（富山）	2	18—15	7—15	15—12 1 宮崎（大阪）
長谷川（進）（石川）	2	15—1	18—13	9—15 1 阿部（埼玉）
辻（東京）	2	17—14	18—16	0 堂谷内（石川）
管	2	15—9	15—8	0 舛田（石川）
今泉（富山）	2	15—9	18—14	0 飯野（東京）
日下（香川）	2	15—3	15—12	0 今井（群馬）
土田（東京）	2	15—5	15—6	10—15 1 鏑木（群馬）

▼同準々決勝

銭谷	2	15—4	15—3	0 米
長谷川	2	15—6	15—3	9—15 1 辻
管	2	15—5	15—12	0 今泉
土田	2	15—6	15—9	0 日下

▼同準決勝

銭谷	2	15—5	15—2	0 長谷川
土田	2	15—7	15—5	0 管

▼同決勝

銭谷	2	15—5	15—4	0 土田

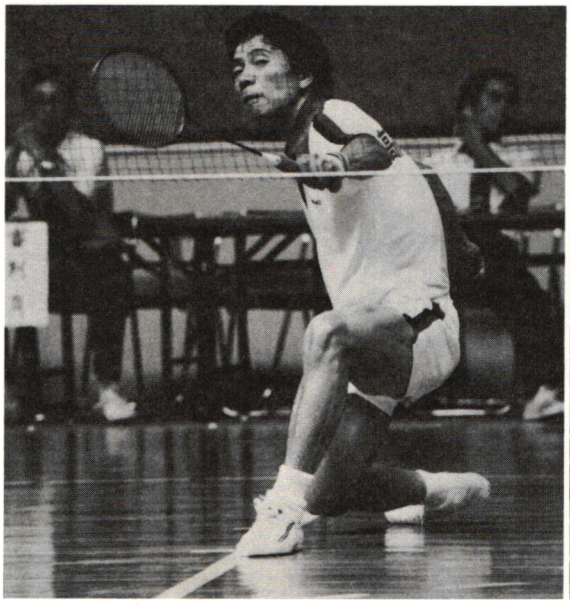
（銭谷は2年連続3回目）

銭谷の最近の充実ぶりはどうだろう。実業団に続いてこの大会を圧勝、相手に与えたポイント数は3回戦の出石（鳥取）に1ゲーム目9点が最高という目を見張るものだった。

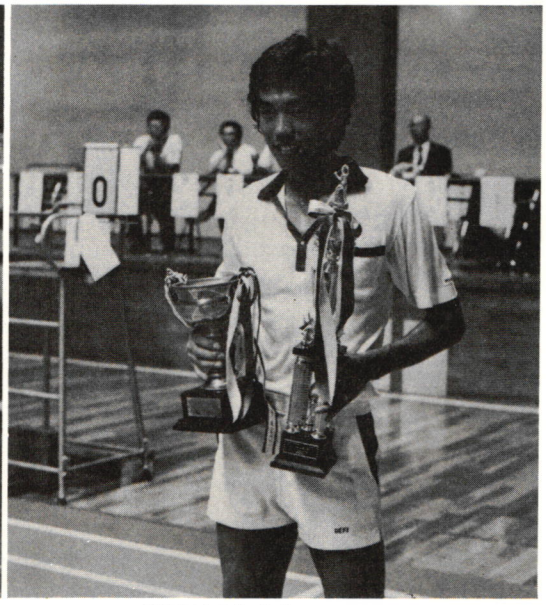
技術的に何がどう進歩したというわけではないが、本人が「シングルスというものが近頃わかってきたような気がする」というように精神的な進境が計り知れない。

大局的な試合の流れをつかむのが鋭いということか、相手の好調時にはジッと耐えてポイントを与えず、相手のリズムが狂ったと見るや、襲いかかるようにポイントを連取する試合運びは、緩急自在のマラソンランナーのようだ。

銭谷と決勝で当たるたびに好ゲームに持ち込んでいた土田は、この銭谷の巧みなペース配分にすっかり惑わされ、この大会は競り合いも前半まで、せっかく切れのよいスマッシュを決めても波に乗ることがどうしてもで



相変わらずしぶといプレーの今泉



〝銭谷時代〟安泰にニッコリ

第23回全日本社会人バドミントン選手権大会

銭谷の強打うなる!!

きなかった。

土田にとって、銭谷は現実に立ちはだかる〝壁〟。一度どうしても越えておかなければならないもの。そして一度壁を破るまでは、精神的にも技術的にも想像以上に大きく重たくのしかかってくるに違いない。しかし〝打倒銭谷〟の旗手として、日本男子のレベルアップのためにも、土田の存在は大きい。いま一度、捲土重来を期してチャレンジ意欲を燃やしてもらいたい。

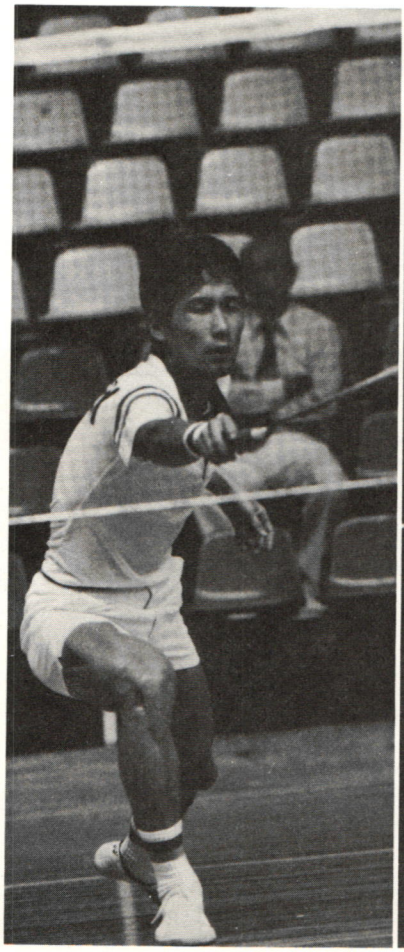
今回、不振に終ったナショナルチームメンバーに代って大活躍したのが、ベテラン中のベテラン、一般シングルス出場最年長の長谷川（進）と、社会人2年目の管。

二人の素顔は別項に譲るとして、共通するのは配球の丁寧さと精神的な落ち着きと断言できる。

一見して派手な攻撃があるわけではないが、いつの間にか相手のふところに飛び込んでしまう執念が、シャトルに対する集中力を生む最大の要因になっていたようだ。

そして今大会では、地味なコツコツと着実に力をつけている選手が、知らぬ間にトッププレーヤーとの間を縮めていることに驚かされた。

もうすっかりベスト8の常連となった米、粘りでは決してひけはとらない宮崎、雑草のようにたくましい阿部、再び台頭してきた堂谷内、いぶし銀のサウスポー今泉、日下、土田から第1ゲームを奪った鏑木など、それぞれ大接戦を演じて、男子シングルスの醍醐味をたっぷりと味わせてくれた。



ガソリンが切れたか？　辻



あいつぐフルゲームにもスタミナの落ちなかった長谷川

9月14日～19日――――群馬県桐生市

徳田、湯木に雪辱し2位へ
復調へもう一歩の米倉

▼一般女子シングルス4回戦

湯木（東京）2　11—1　11—0　0　飯野（千葉）
原口（大阪）2　11—3　11—3　0　端（東京）
高田（大阪）2　11—2　11—2　11—2　1　大嶌（栃木）
徳田（大阪）2　11—2　11—2　0　大塚（東京）
米倉（東京）2　11—1　11—4　0　平松（埼玉）
関根（東京）2　11—1　12—9　0　高岸（東京）
東海林（大阪）2　11—0　11—5　0　日山（栃木）
近藤（東京）2　11—3　11—3　0　葛西（大阪）

▼同準々決勝

湯木2　11—4　11—4　0　原口
徳田2　11—5　11—4　0　高田
米倉2　11—6　7—11　11—8　1　関根
近藤2　12—9　11—7　0　東海林

▼同準決勝

徳田2　11—8　2—11　12—9　1　湯木
近藤2　11—4　11—6　0　米倉

▼同決勝

近藤2　11—3　11—4　0　徳田

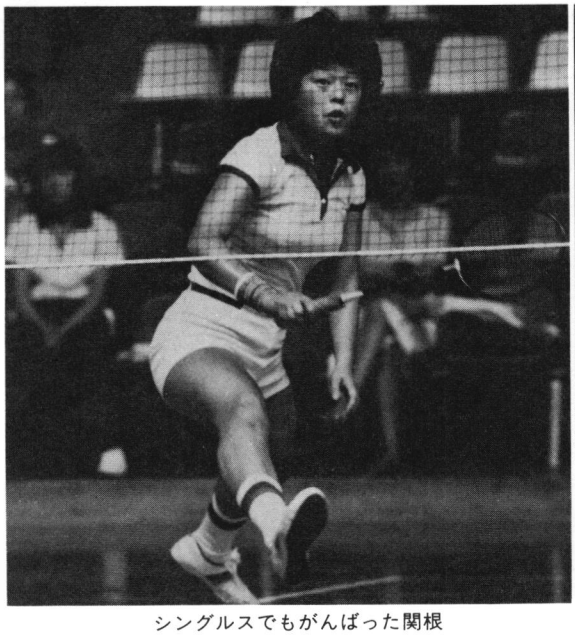
（近藤は初優勝）

大会ごとに熾烈な戦いを演じる〝4強〟の中から、果たして今大会はだれが抜け出すか、戦前から興味はこの一点に絞られていた。

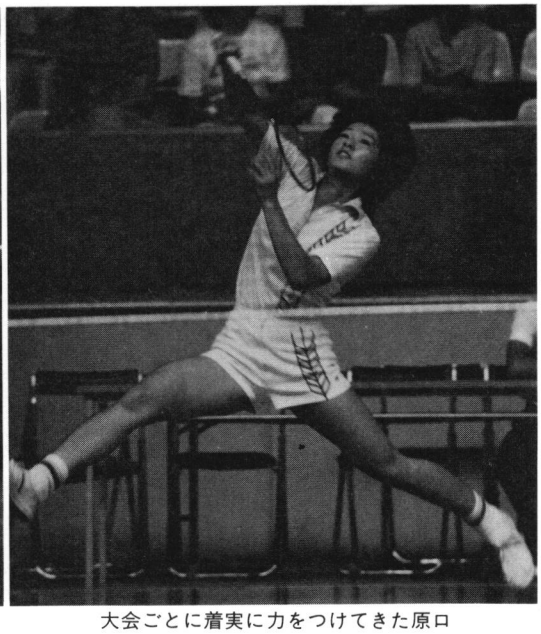
実業団で復活のノロシを上げた湯木、最近シングルスにも再び気力が見える徳田、やや調子は下降ぎみだがこの一年の進境度は随一の米倉、虎視たんたんとここ一番の勝負強さに賭ける近藤、と相変らず予断を許さぬものがあった。

そして、この中でやはり元気がなかったのが米倉。関根にくい下がられやっとの思いでベスト4へはい上がってきたが、近藤に攻められどおしで完敗、一時の勢いが影をひそめてしまった。

逆に近藤は、速いクリアーとカットで米倉を泳がせ、ジャンプスマッシュを積極的に用いて攻撃一点張り、久し振りに近藤らしい強気なプレーで、期待を抱かせるのに十分。余裕を持っ



シングルスでもがんばった関根



大会ごとに着実に力をつけてきた原口

第23回全日本社会人バドミントン選手権大会

近藤のジャンプ・スマッシュさく烈

て決勝へ勝ち進んだ。

最近好調な徳田対湯木の準決勝は、徳田が先手を取り、湯木が追いかける〝二人のパターン〟となった。が、徳田は実業団で喫した苦杯を薬にしたのか、第2ゲームをあっさりと抵抗なく湯木に与え、すべてをファイナルゲームに賭ける〝頭脳的かけ引き〟。これが見事に成功して、ファイナルゲームは集中力が戻って、得意のクリアーが深く正確に湯木を襲い、気分と力で湯木の反撃をかわした。

決勝は、しばらくシングルスの優勝から遠ざかっている近藤対徳田の対戦となった。

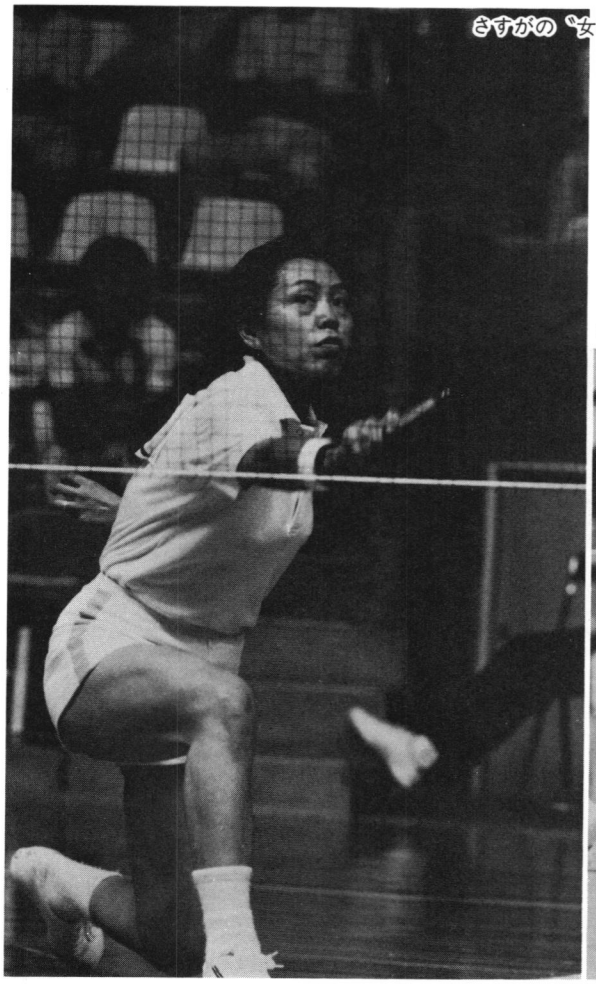
近藤は、決勝でも自信を持って攻撃を仕掛け、4オールまで一進一退が続いたが、豪快なジャンプスマッシュなどで徐々に得点、徳田のコントロールミスにも助けられて難なく第1ゲームを先取した。

そして第2ゲームも、クリアーミスなど乱調になった徳田を大きく引き離して完勝。湯木が7年連続守ってきたタイトルを受け継いだ。

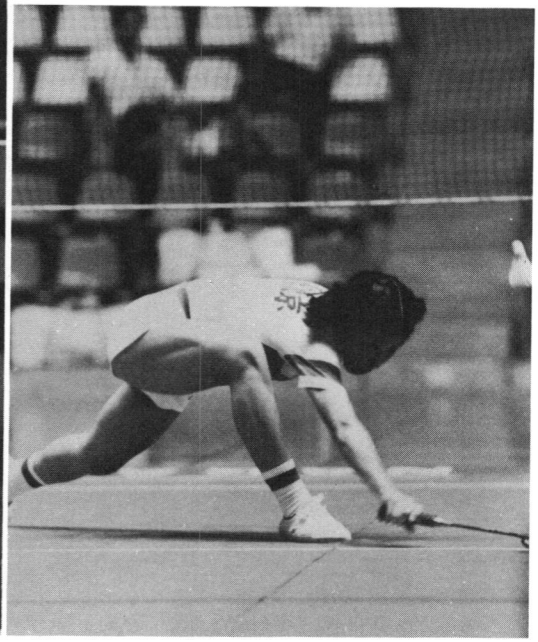
来年のユ杯を占う意味では、大会ごとに優勝者が替わることは、層の厚さを物語るようでもあり、軸になる強力なエースの不在を示すようでもあり、日本にとっては痛しかゆしといったところか。

しかし、この〝4強〟の争いはますます激しくなっていきそうな様相を呈している。その中から早く〝本物のエース〟の出現を望みたいものである。

さすがの〝女王〟湯木も今回はベスト4



受け身にまわることが多かった米倉



栂野尾・飯野みごとな速攻

辻・長谷川も内容充実

田所・土田、接戦に涙のむ

▼一般男子ダブルス4回戦

池田信尾崎2（東京）
15 15 10 7
0 森下和田（大阪）

今泉米沢2（東京）
15 15 12 7
0 松口辻（富山）

長谷川（博）2（東京）
15 15 5 5
0 高木米山（北海道）

銭谷中井2（東京）
18 15 14 5
0 西川根岸（東京）

栂野尾飯野2（東京）
15 15 4 1
0 佐藤平沢（北海道）

池田隆遠藤正2（神奈川・東京）
15 15 12 10 11 15
1 西村増田（滋賀）

舛田長谷川2（進）
15 18 3 16
0 鈴木遠藤好（新潟・北海道）

田所土田2（東京）
15 15 10 15 4 5 15
1 山本坂本（愛知）

▼同準々決勝

池田尾崎2
15 15 0 11
0 今泉米沢

辻長谷川2
17 8 15 15 16 3
1 銭谷中井

栂野尾飯野2
15 5 15 11 2 15
1 池田遠藤

舛田長谷川2
15 15 12 4
0 辻田所

辻長谷川2
15 15 12 5
0 池田尾崎

栂野尾飯野2
15 15 11 12
0 舛田長谷川

▼同準決勝

栂野尾飯野2
15 15 6 8
0 辻長谷川

▼同決勝

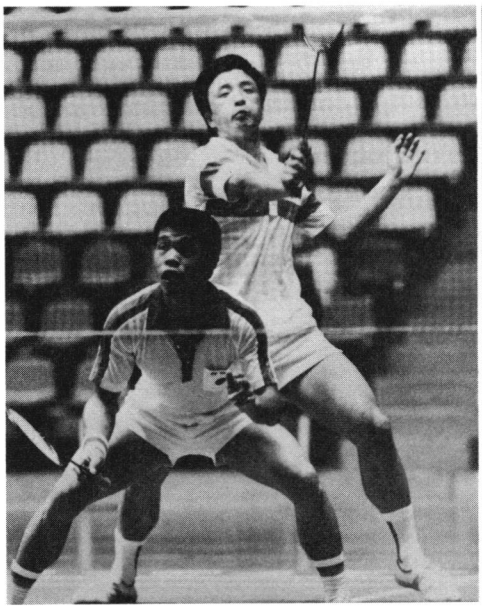
実業団に続いて、栂野尾・飯野組の安定した実力が光った。

栂野尾の好レシーブと、相手の攻撃を巧みにかわすハーフライブ、飯野のスマッシュと、前衛における先陣争いの鋭さ、それら技術的な裏づけを立証するように、チャンスでは大胆に競合いでは確実に、技術を操る精神的な余裕を披露してくれた。

若さを誇る辻・長谷川（博幸）組は、久し振りに大型コンビの底力を発揮した銭谷・中井組にマッチポイントを握られたが、辛うじて逆転に成功。続く池田・尾崎組との準決勝では、やや調子の出ない池田組に攻め込んで得意の強打を連発、若さ特有の〝強さともろさ〟の同居を見せながら決勝へ進出した。

しかし〝もろさ〟を突くのは栂野尾組に一日の長。

第1・第2ゲームとも、辻組が力で押し込むのは中盤まで、それからはパワーも若さも空転するばかりで〝もろさ〟を暴露してしまった。



集中力がもう一つ不足だった池田・尾崎



タイトルを手にホッとした表情の栂野尾・飯野

徳田・米倉ユーバー杯へ曙光

近藤・高田、気合をこめて準優勝

大会もり上げた平・河村

▼一般女子ダブルス3回戦

土田 原口
原田 2 0
15—5 15—11
葛西 端
（東京） （大阪）

河村 平 2
15—5 15—7
0 高岸 飯野
（大阪） （東京）

梅野尾 小菅
石田 2 0
15—4 15—7
平野 中沢
（東京） （千葉）

米倉 徳田 2
15—1 15—4
0 谷 西村
（新潟） （大阪）

関根 大塚 2
15—2 15—0
0 渡辺 沢内
（東京） （大阪）

東海林 横山 2
15—4 15—7
0 柳田 安田
（東京） （愛知）

近藤 高田 2
15—5 15—1
0 山田 磯崎
（大阪） （香川）

日山 日向野 2
15—8 12—15 15—10
1 土田 原田
（栃木） （東京）

河村 平 2
15—3 18—13 11—15
1 梅野尾 石田
（香川） （東京）

米倉 徳田 2
15—8 15—11
0 関根 大塚
（東京） （大阪）

▼同準々決勝

東海林 横山 2
18—16 15—8
0 日山 日向野
（栃木） （東京）

近藤 高田 2
15—7 15—1
0 河村 平
（愛知） （東京）

米倉 徳田 2
15—7 15—3
0 東海林 横山
（東京） （栃木）

近藤 高田 2
15—3 15—13
0 近藤 高田
（東京） （愛知）

▼同準決勝

米倉 徳田 2
17—14 15—11
0 東海林 横山
（東京） （栃木）

▼同決勝

米倉 徳田 2
15—3 15—7
0 近藤 高田
（東京） （愛知）

（米倉・徳田組は初優勝）

女子ダブルスは、梅野尾・石田組、東海林・横山組、河村・平組の上位進出によってぐっと試合内容が充実したものになった。

梅野尾・石田組は、例によって梅野尾の好リードで、石田の全能力をひき出し、米倉組を上回る巧みさを見せた。しかし大砲のいない寂しさ、迫力不足の感はあったが、さすがに〝ダブルスの梅野尾悦子〟を久し振りに堪能させてくれた。

ベスト4の常連、関根・大塚組に打ち勝ったのが、東海林・横山組。

徳田にソックリな体つきで、最近メキメキ力をつけてきた横山と東海林のサウスポーがコンビネーションよくかみ合って、〝王国・サントリー〟の層の厚さを見せつけた。

そして昨年の優勝ペア、土田・原田組を大逆転したのが河村・平組の社会人1年生コンビ。

試合は、技巧に優る土田組が第1ゲームを先取し、第2ゲームも終盤まで一方的にリードを保って、ストレートで勝負が決するかと思われた。しかし、そこからが河村組の真骨頂だった。土田組の攻撃を、それこそ転がるようにして拾いまくりジワジワと反撃、体力そして精神的スタミナの勝負に持ち込んだ。土田組はもう勝ったと思った試合を振り出しに戻され、完全にアゴを出した格好、セッティングになると根気もすでに消えていた。

これらのペアの活躍によって、米倉組の独走と思われたこの種目が意外な盛り上がりを見せたことは事実。それに刺激されたのか、近藤・高田組もまた充実著しいところを見せた。

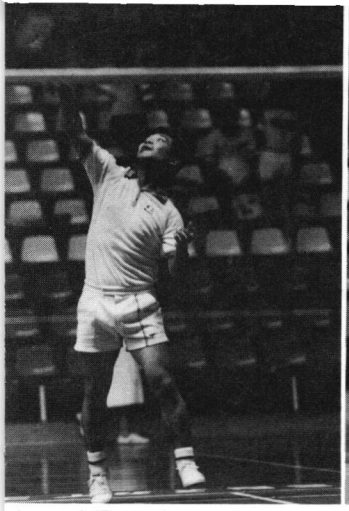
これまで米倉・徳田組とはかなりの距離が感じられたが、その距離が今大会の決勝で一気に縮まったような気がしたといったら早計であろうか。

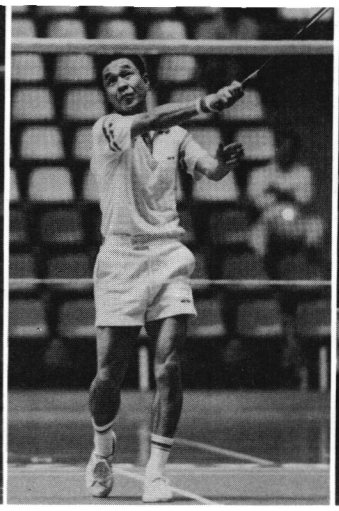
高田の速いリターン、近藤の攻撃力という長所が随所に生かされ、米倉組と互角のゲーム内容となった。とくに第2ゲーム、マッチポイントを長いラリーの応酬で逃がれたあと、近藤が思わず「走れ」「打て」と叫ぶほどの気迫を見せ、セッティングに持ち込んだあたりは圧巻だった。まだ凡ミスの続く欠点はあるが、近藤にダブルスの欲が出てきたことは、ユ杯を来年に控えて明かるい材料といえる。

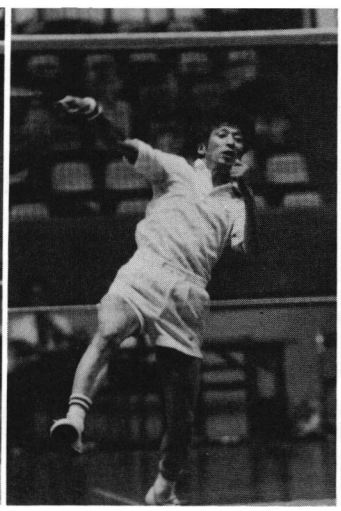
優勝した米倉・徳田組は、何といっても総合力の違いで栄冠を手にしたが、米倉のスピードがやや落ちていたのが不安といえば不安。徳田の調子が上がってきただけに大事には至らなかったが、早く春当時の好調さを取り戻してほしいものだ。



栃の葉国体をひかえて健闘の日山・日向野

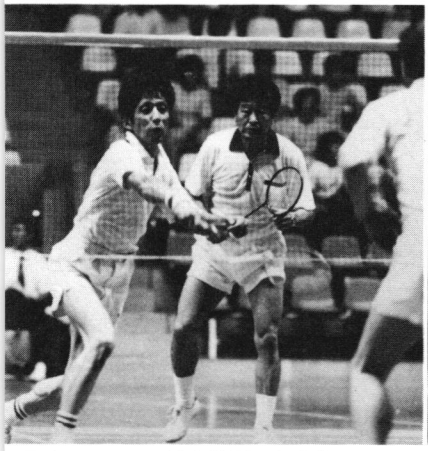


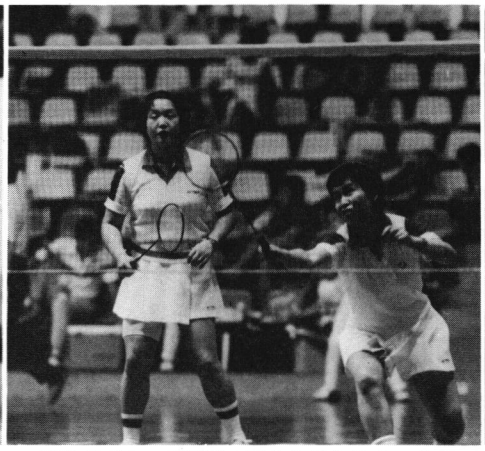


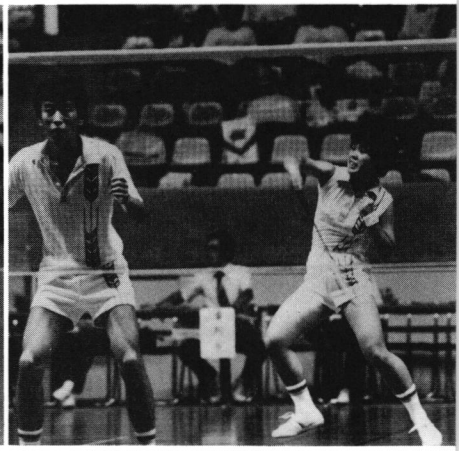




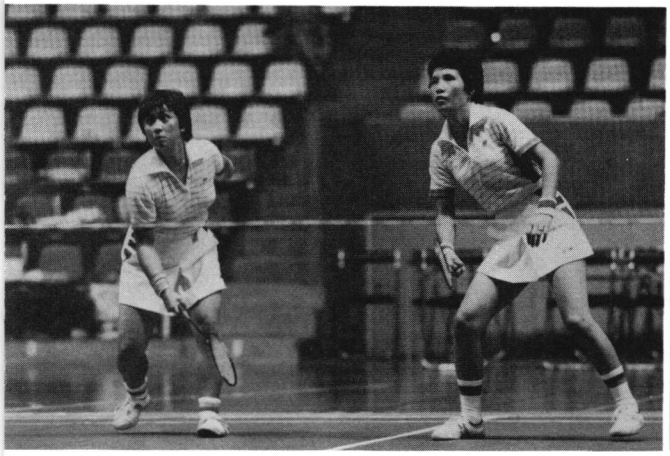
力には自信、30歳シングルス優勝の芳上　40歳シングルスを制した星野　50歳シングルスを制した柳田　初優勝に笑いが〝もうトマラナイ〟







テクニシャンぶりを発揮した斉藤・柳田　40歳ダブルスで断然の差をみせた島中・山口　試運転も上々、宮崎・高田





あと一歩で30歳ダブルスの優勝を逃した西野・渡辺　戦い終れば〝お疲れさま〟柳田と浜中

大逆転で見事に30歳ダブルスに優勝の森本・田中　若さでがんばった宮森・三田　「トッテー！」「ソーレッ」荒川・笛吹







森下・谷ミックスを若さで制す

星野(40単)往年のプレーを再現
芳上(30単)スタミナで圧倒
森本・田中(30女複)みごとな大逆転

▼混合ダブルス準々決勝

栂野尾 栂野尾	2	15-11 15-6	0	中村 豊田 (千葉)
宮崎 高田	2	15-2 15-10	0	杉田 杉田 (神奈川)
栗原 神山	2	15-11 2-15 15-8	1	宮森 三田 (東京)
森下 谷	2	15-3 15-5	0	新田 四宮 (香川)

▼同準決勝

栂野尾 栂野尾	2	18-14 15-3	0	宮崎 高田
森下 谷	2	15-3 15-10	0	栗原 神山

▼同決勝

森下 谷	2	15-12 15-11 3-15	1	栂野尾 栂野尾 (森下・谷組は初優勝)

▼30歳男子シングルス準決勝

小柳 (千葉)	2	15-2 15-2	0	馬場 (東京)
芳上 (岡山)	2	15-2 15-5	0	新井 (千葉)

▼同決勝

芳上	2	15-9 15-3 4-15	1	小柳 (芳上は初優勝)

▼30歳男子ダブルス準決勝

小柳 新井	2	15-6 15-5	0	古明地 鈴木 (東京)
井上 浅野	2	15-7 15-8	0	大原 町田 (東京)

▼同決勝

井上 浅野	2	15-2 13-18 15-3	1	小柳 新井 (井上・浅野組は初優勝)

▼40歳男子シングルス準決勝

百瀬 (長野)	2	15-11 7-15 17-16	1	田中 (熊本)
星野 (島根)	2	15-3 15-13	0	南 (熊本)

▼同決勝

星野	2	15-3 15-4	0	百瀬 (星野は初優勝)

▼40歳男子ダブルス準決勝

西田 南	2	15-4 15-11	0	堺 山本 (富山・高知)
中田 七沢	2	15-7 18-15 9-15	1	星野 小林 (島根)

▼同決勝

中田 七沢	2	15-5 17-14	0	西田 南 (静岡)

▼50歳男子シングルス準決勝

浜中 (愛媛)	2	15-9 15-9	0	中島 (長崎)
柳田 (東京)	2	15-5 15-8	0	曽根 (京都)

▼同決勝

柳田	2	15-10 15-9	0	浜中 (中田・七沢組は初優勝)

▼50歳男子ダブルス準決勝

浜中 森脇	2	15-7 15-7	0	金田 曽根 (京都)
斉藤 柳田	2	15-3 15-10	0	紀田 新宮 (京都)

▼同決勝

斉藤 柳田	2	15-11 15-8	0	浜中 森脇 (斉藤・柳田組は初優勝)

▼30歳女子ダブルス準決勝

西野 渡辺	2	15-11 15-2	0	小川 福生 (東京)
森本 田中	2	15-4 15-11	0	小守 寺田 (東京)

▼同決勝

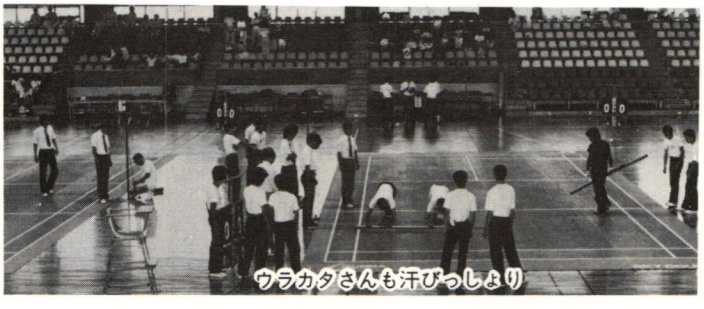
森本 田中	2	15-11 15-7 14-17	1	西野 渡辺 (森本・田中組は初優勝)

▼40歳女子ダブルス準決勝

荒川 笛吹	2	15-4 15-6	0	水口 白倉 (キケン) (東京)
島中 山口	2	15-0 15-12	0	竹内 根岸 (北海道) (東京)

▼同決勝

島中 山口	2	15-4 15-6	0	荒川 笛吹 (島中・山口組は初優勝)


ウラカタさんも汗びっしょり

バドミントンの虫

——長谷川　進

●年齢　昭和22年11月22日、石川県大聖寺に生まれる　32歳
●身長　一七五センチ
●体重　63キロ
●出身　大聖寺高、立命館大
●主な戦績　学生時代には華々しい成績はない。大学1年のとき新人戦で3位、2年のとき西日本学生でベスト4があるぐらい。79年度教職員大会シングルスに優勝、初のタイトルを握ってからにわかに充実、今年も同大会を制した。かつて全日本社会人で小島一平と決勝を争ったこともあるように「社会人」には強いという定評がある。

開口一番、今度の大会は「ミスが多くて苦しかった」というが、言葉とはウラハラに表情からは力いっぱい戦った満足感、充実感がうかがえる。

「何度も、もうだめだと思った」そうだが、国体の代表という責任感がムクムクとわき上がってきたらしい。

そういえば、3回戦の石黒、4回戦の米沢、5回戦の阿部、準々決勝の辻と、それぞれ第1ゲームを取られながらの逆転劇は、体力もさることながら精神的な疲労も相当なものだったろう。

もうじき（11月）33歳になるのに、この充実ぶりはどうだろう。驚異としかいいようがない。

しかしそれも〝バドミントンの虫〟とまでいわれる練習量を誇る長谷川選手ならではのこと。その練習量で〝バドミントン界の七不思議〟といわれた教職員での無冠も昨年返上、「夏に弱い」欠点も同時に解消した。

遅咲きの典型というのか、最近の活躍の裏には、異色な長谷川選手の道程がある。

レベルの低い西日本での経験から、長谷川選手は「いくらやっても関東の選手には勝てないと思った。それでなくても関西のプレーヤーには、関東に対するコンプレックスがあって…。大学を出てから一時は、コーチに専念していた時期もあった。そして選手を育てて、いろいろなプレーヤー、指導者の人達と接するようになって、コンプレックスがだんだんなくなってきたら、またプレーをしてみたくなった」というから面白いものだ。

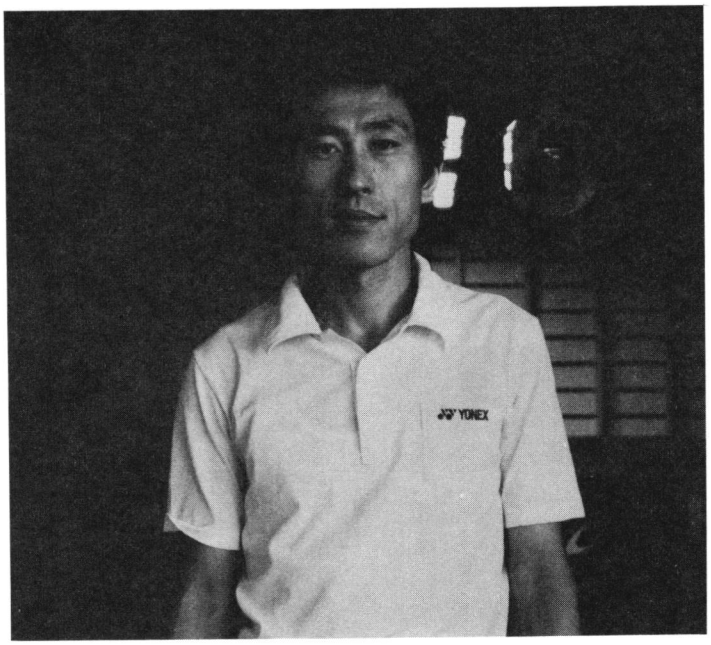
当時、ナショナルチームの一員だった伊藤さん（日大出）に勝って自信がつき、今日に至っているという。

「私の場合、33歳とはいっても、途中で休んでいるし、ボクシングの輪島でさえ35歳までがんばっていたのは、ボクシングを始めたのが遅かったから。気持次第じゃないでしょうか。そのぶん家族には迷惑のかけっぱなしですが……」

26歳で結婚、1歳になる坊やと4歳のお嬢さんを持つパパでもある。

「私のプレーは、特別キレのある攻撃力があるわけでもないし、特別粘るわけでもないから、長丁場にもっていき、ゲームを大局的に見ながら進行させるだけです」と自分のプレーを分析してくれるが、シングルスではその冷静な目が重要なポイントであることはいうまでもない。

若い人達の良き〝手本〟として、まだまだラケットを振り続けてほしいものである。



"自分の型"を求める

――管　敏明

●誕生　昭和32年3月21日
●年齢　23歳
●出身　長崎県島原
●身長　一六九・五センチ
●体重　63キロ
●主な戦績　瓊浦(けいほ)高時代に選抜高校で準優勝（そのとき優勝したのが大学時代のパートナー米山孝二選手）。インターハイでは複ベスト4、単ベスト8。中央大学4年で米山選手とコンビを組み、インカレ複を制覇。2年の新人戦では同僚・長谷川博幸選手を破り、シングルスに優勝。

大学後半から、やや不振をかこっていた管選手が、ベスト4進出という離れ業をやってのけた。

それも、3回戦で林田選手をファイナルゲームのすえ降し、4回戦ではナショナルチームの一角、長谷川博幸選手を競り落としてのものだから、絶賛してもし過ぎることはない殊勲といえる。

「会社の先輩から〝ガムシャラに打ち過ぎて自滅することが多いから気をつけるように〟とつねづねアドバイスを受けているので、丁寧に配球することを第一に心掛けています。それが少し思い通りにできるようになってきた」そうで、攻撃型からレシーブ型への変身が今回の大活躍の要因となったようだ。

なるほど、特別に速いスマッシュがあるわけではないのに、無理して決めようとしていたきらいが過去の管選手にはあった。

学生同士の試合では、それでも結構通用していたのが、社会人ではそうもいかなくなってきた。昨年一年間でそれをしみじみ悟らされたのだろう。学生の試合では、かならず上位入賞を果たしていたのが、ベスト8にも入れない一年が続いた。社会人の壁をイヤというほど感じたのかも知れない。

いずれにしても、プレーを変えることは容易なことではないはず。そのあたりを管選手は、

「結婚をしたうえに、6月28日に子供が生まれたので、生活に張りができました。漫然とやっているだけでは、何かすまないような……、どうせやるからには一生懸命に、持てる力を全部出し尽したい、と思うようになりました。昨年までは寮生活で、潤いというものがなく、考える余裕がまったくありませんでしたが、一日一日に張り合いが出てきて、それではいけないと思いました。考えるプレーにしなければと」

と、愛妻家ぶり、子ぼんのうぶりを発揮することも忘れない。

「練習時間は短いですが、集中力が出てきました。中身の濃い練習を心掛けています」

管選手は、実業団でも梅野尾選手を破り、ベスト8へあと一歩とつめ寄ったが、ファイナルゲームのすえ宮森選手に敗れている。この時点で、客観的に見て変身のきざしが表われていたのかも知れない。これでオールジャパンの出場切符を手にしたことになる。試合を振り返って本人は、

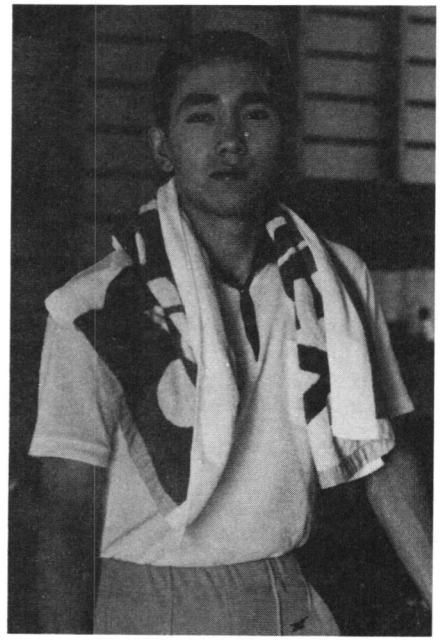
「勝とうという意識はあまり強くなかったように思う。無欲だった。何しろ落ち着いてプレーできたし、ポイント数が全然気にならなかった。勝負よりも自分のプレー、先輩のアドバイスに気をつけて、丁寧なプレーだけをしようと思った」

というとおり、気負いがなく、全神経をシャトル一点に集中させたことがうかがえる。

「これから、留守番役として実家に引っ越しです。また環境が変わるしがんばります」

準決勝では、土田選手のスピードに合わせようとして、一瞬ムキになったところもあったが、後半は再び自分のプレーに戻って健闘していた。

まだまだ社会人2年生。自分のプレーを探求する気力がある限り、活躍の場は一段と広がっていくことだろう。



実りあるインドネシアの2週間

本場のトレーニングで汗を流し、貴重な体験をした全日本学生チーム

全日本学生選抜チームは、8月20日から9月2日までの2週間、インドネシアに遠征しました。当初は8月7日からの予定でしたが、インドネシア協会の事情で、この日程となったものです。

また、内容も対抗戦は行なわず、インドネシアのコーチのプログラムでの強化練習に取り組みました。そのために、かえって密度の濃い〝インドネシア式〟強化を体験することができたようです。

インドネシアのナショナル・チームの練習も間近かに見学でき、ルディ・ハルトノや女子コーチのミナルニらとも意見の交換をしたそうです。

選手それぞれの遠征感想記が届きましたので、ここにご紹介します。

実戦的なトレーニング

西山博司

インドネシア遠征が本格的に決定した時は、初めての遠征であり、学生代表として行くことの不安と、バドミントンのチャンピオン国（男子に関して）に行けるという喜びとが入り交った複雑な心境であった。

8月20日、成田11時15分発のCX—501で出発し、21時20分ジャカルタに到着。空港には、インドネシアのバドミントン協会の方数名が出迎えてくれ、たいへん歓迎された。

練習日程は、朝7時から8時30分の1時間半トレーニング、夜18時から20時の2時間羽根打ちと、時間的には楽なように思えたが、内容が日本でやるような乱打中心でなく、基礎練習ばかりであったため、思ったよりつらかった（内容に関しては、インドネシアのコーチ2人によるもの）。

朝のトレーニングに関していうと、ダッシュ・フットワーク・階段・シャトル運び等その他たくさんの種類があり、一つ一つがすべて実際のゲームに結びつく実戦的なものであった。夜の練習に関しては、ほとんどが高校時代にやった内容のものであり、2対1の連打形式中心で、つねに〝より高く・より前で・より速く〟を口うるさくいわれた。

彼らのバドミントンは、つねにシャトルを上から叩く感じであり、手首の強さ、ジャンプ力には目を見張るものがあった。また彼らは、バドミントンを楽しく、その反面、いつも厳しさを忘れずにやっている。

練習時には、コーチ2人（男1人、女1人）が付きっきりで、その観察力にもおどろかされた。

2週間という短い期間ではあったが、遠征に参加でき、インドネシアの選手と一緒にプレーできたことは、自分にとってたいへんプラスになり、彼らの練習に対する意欲のりっぱなこと、指導者にめぐまれない日本では、自分達で努力してやるしかないことをあらためて痛感した。

（中央大学3年）

目についた攻撃型選手

坂井茂則

自分はインドネシアに来るのは今回で2度目なので、他の選手より気持ちに余裕があったのではないかと思う。

機内から出てインドネシアの空気にふれたとき、なぜか喜びの気持ではなく、〝ああ、またきてしまった〟という複雑な気持ちだった。

朝の練習というのはグラウンドでのトレーニングだったのだが、内容は、常にバドミントンのフォーム、スタミナを想定してのもの。コーチは、その日によって選手の体調をみて練習の強度をきめるようだ。

トレーニングでもダッシュやランニングなどでもタイムを計り、選手たちに闘争心を養成させる。また、遊びながらトレーニングする練習などもあった。

夜の練習の内容は、コートでの基本練習だったが、その基本というのは、自分たちが学校でやっているものとほとんど同じだった。コーチに聞いてみると、インドネシアの練習というのは、この基本練習の繰り返しだという。そういえば、自分たちが初日インドネシアチームの練習を見学したとき、選手が一つのことを、黙々とやっていたのをおぼえている。こういうのを見ると、自分たちと、向うの選手との、バドミントンに対する考え方、うちこみ方、環境が違うことをつくづくと感じた。

向うとの試合においては、ダブルスに関し



後列左から、野口英代、宮本幸弘、田村圭香、西山博司、久郷俊明、星野寛一、原田純子、山本次生協会同行員。前列左から、須貝英徳、坂井茂則、月岡広美、小野順子、高峯彰子、権藤浩二。

ては、絶対勝てると思った。ただネットプレーには見習うところがある。パワーはすごいの一語。ツボに入ったらスマッシュの速いこと。しかし雑なので、自滅が多かったと思う。シングルスは、とにかくノータッチがほとんどといっていいほどない。体が柔らかく、無理な体勢でもスマッシュを打ってくる。それが打った後、体がふらつかない。やっぱり向うの選手は、攻撃型の選手ばかりだった。

最後に、バドミントンをやっていて、こういうチャンス（海外遠征）にめぐまれたことは、大変に幸運なことであり、この経験をムダにすることのないよう、毎日がんばっていくつもりです。

（日本体育大学3年）

集中しての短時間練習

久郷俊明

海外遠征は初めての経験で、どこまでみんなと一緒に練習についていけるのかという不安や、外国でのコンディション作りなど、最初は、わからないことばかりでした。

実際、バドミントン最強国インドネシアに遠征していろいろなことがありました。何といっても、われわれと比べてバドミントンに対する情熱・気迫というものは全く異なっていました。

我々の毎日毎日の練習は、あちらのジュニアチームの合宿に加わって行なわれました。通常、日本で合宿というと、短期間の練習で無理をしてケガをしたり、結局は自分の体をこわしてしまうケースが多いと思うのです。それに比べてこちらの合宿生活というものは、短時間集中し、あくまでもバドミントンという競技に関連した実践的なトレーニングを、うまくこなしていました。

たとえば、シャトル打ちでも、早朝のトレーニングでも、ダッシュ、フットワーク、その他、足、腰、腕などの筋力の強化など、毎日毎日がその反復、基礎中心でした。

また遠征中の二日間、ナショナルチームの練習を見学に行きました。シャトルのスピード、パワー、体力、すべて我々日本人とは数段の違いがありますし、本当に同じスポーツをしているのかと、驚くほどでした。

最後に、二週間近い遠征を振り返ってみると、たしかに我々の住んでいる日本とは、暑さも食べ物も異なっているし、あちらでの生活は、本当に大変でしたが、とても楽しく過ごすことができました。

バドミントンをプレーしている以上、もっともっと強くなりたいし、遠征で学んできたものを、自分のためばかりでなく後輩に指導し、少しでも役立てていきたいと思っています。

（法政大学3年）

異色メンバーに意欲

須貝英徳

初の海外遠征、不安と期待で出発したインドネシア遠征であったが、いざ着いて練習が始まると、一つでも多くのものを理解して身につけようとすることでせいいっぱいの毎日でした。

練習は、朝5時半に起きて、7時から8時半までのトレーニング、それから日中は休んで、夕方6時から8時までの羽根打ちでした。練習内容は、多種多様なもので、身につくものが多く、とても勉強になり、また最後2日間に試合をしたのも勉強になりました。

しかし、不便だったのは、練習場まで45分くらいかかるのです、それだけならまだしも、タクシーかホテルのバスで、普通の道を100キロぐらいのスピードで行くのです。タクシーなんかで行く時はもうメチャクチャで、速度メーターが壊れていたりして、交通ルールもあったものじゃありませんでした、練習よりも緊張したのが、とても印象的でした。

一日が終れば、もう疲れて、9時頃に帰って来て夕食を食べて寝るという日々でした。

毎日が、同じように過ぎて行く中で、初めは、こんな練習、毎日続けて行くのは、〝つらいなあ〟と思っていましたが、練習が最後に近づくにつれて、もっと、ずっと練習していたい、明日も、また次の日もと残る日数を惜しむようになっていたのが、不思議でした。それだけ魅力的なものが、インドネシアの練習にあったのか、または、異色なメンバーでの練習に興味が出たのか、今から思えばその両方であったと思います。

最後に振り返ってみると、とっても良い経験であったと思います。また、このような、遠征が数多く、もうけられることを望みます。

（中央大学2年）



女子コーチ、ミナルニを囲んで

飛びついてのアタック

権藤浩二

自分はインドネシアに行くのは、2回目だったので、やはり1回目より、安心感があり余裕もあった。しかし前回は、試合を見に行くだけ、今度は練習をしに行くということで、心構えも違っていた。

インドネシアに行きどんな練習があるのかとても楽しみだった。ハルトノ、リム・スイ・キンなどの選手がやった練習を、自分たちもやり、強くなるかもしれない感じがしていた。練習日程は、ほとんど毎日同じだった。

時間が、朝が7時から8時半まで、夜が6時から8時までの練習だったので、昼は寝てばかりいた。朝は5時半起床で、練習も朝早くから、こんな経験はしたことがないのでとてもつらかった。しかし、慣れというものはこわいもので、後半は自然に目がさめていたから不思議だ。日本に帰っても朝早く目がさめる習慣がついてしまった。

練習内容は、トレーニングを中心にしたものであったが、いろいろなトレーニングをさせられて感じたのは、すべて実戦に役立つものばかりで、おもに瞬発力をつけるものが多かったような気がする。それほどつらくはなかったが毎日となるとつらいと思う。

夜の練習は、羽根打ちで、毎日基本の繰り返しだ。これもまた、実戦につながるようなものばかりだった。高校時代にやった練習と同じのがあるといっていた人もいましたが、自分の場合初めてやるような練習ばかりだった。とくに、チャンスボールが来た時に、飛びついて打つ練習をさせられたのが一番印象深かった。

全体的に、思ったよりつらくなかったが、自分たちは、合宿という感じで受けとめていたからで、現地の人は、それが毎日の練習なのだから、感心させられた。自分の場合、一年で遠征に参加でき大変ためになった。これからも自分でとらえたものを、生かしていこうと思う。

（日本体育大学1年）

豊富なプログラム

高峯彰子

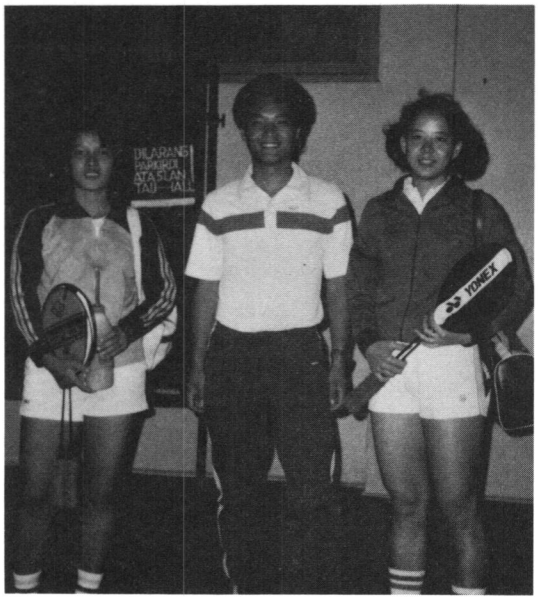
初めての海外遠征だったのですが、やはり見知らぬ土地へ行くということで不安でした。しかし、同行した皆様のおかげで無事帰って来ることができました。

インドネシアは、空港へ降りた瞬間から土地独特の臭いがありムッとした感じでした。気候は乾期にはいっていたため、雨も降らず日中は暑いのですが、朝夕は涼しく過しやすい毎日でした。

練習は朝1時間半のトレーニングと夕方6時から8時までの2時間のシャトル練習で、インドネシアのコーチの指示に従って行ないました。

インドネシア方式の練習をして感じたのは、トレーニングの種類が豊富であること、基本を忠実にやっているということ、トレーニングにしてもシャトル練習にしても実戦に結びつくように行なわれているということです。

それにやはり国技というだけあって、バド



チャン・ソー・ガン(右)とジュニア・チャンピオンにはさまれてゴキゲンの星野クン

ミントンに関して、タイムを計ったり、トレーニング後の脈拍数を計って記録を取ったりするところや、トレーニングのやり方等いろいろな方面から研究されていると思いました。

バドミントンをやっている者にとってインドネシアに行くということは大変勉強になると思うし、また行ってみなければ、どのような環境の中で選手が育っていくのかというのもわからないと思います。

日本にいたら日本の良さはわからないとよくいわれますが、まさにそのとおりで、外国へ行って初めて日本の良さがわかるのではないでしょうか。

自分の目で見て体験するのが、一番良い勉強だということを痛感した遠征でした。

（日本女子体育大学2年）

充実している基礎体力

小野順子

8月20日から9月2日の2週間にわたってインドネシア遠征に行ってきましたが、私にとって初めての海外遠征で最初はどうなるかと不安で一杯でした。

まず最初にインドネシアに行って驚いたのは交通の激しさです。この国は、交通事故さえ起こさなければ何をしても違反にならないということで、車のスピードは、必ず120キロくらいは出して走るのです。ある車にはサイドミラーはないし、ひどい車になるとスピードメーターが壊れているのです。結局道幅も広いし、運転もすごく上手なため事故は起こらないのですが、慣れていない私達は心臓が縮まる思いで毎日タクシーに乗り、練習会場に通っていました。

練習の方は朝トレーニング、夜は羽根打ちでおもに基本練習でした。トレーニングの方は、毎日内容が違っており、そのなかで一番印象に残っているのは200メートルダッシュです。最初1本で終わりと思っていたのが3本もあり、あの時の苦しさは今でも忘れません。

しかし、私達が3本で苦しいといっていたのにインドネシアの人達は6本を平気でしていることに驚きました。やはり身体のつくりが違うのでしょうか。夜の練習もインドネシアのコーチに指導され行なうのですが、自分自身、基本の足りなさを身をもって感じました。

私にとって今回の遠征に参加できたことは、いろいろな面でプラスとなり勉強になりました。一番心配していた食事の方もホテルの方で日本料理など多彩な物を口にすることができました。途中少し体調を崩してしまいましたが、私なりに充実した生活が送れたと思います。

これからは、この経験を生かしがんばりたいと思います。

（日本女子体育大学2年）

巧みなネット際の処理

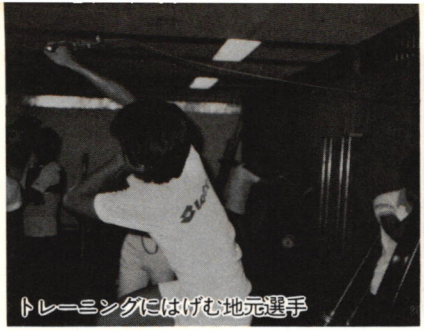
田村圭香

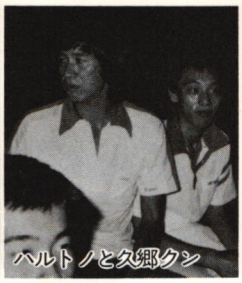
1日目の練習で基本を少し打っただけなのに大変厳しく、2時間の練習で、バテバテになりました。やはり、日本との気候のちがいで、身体がインドネシアに慣れてないせいだと思いました。

2、3日ごろになると気候にも慣れ、思うように体が動くようになってきました。早く気候に慣れるために、ホテルのクーラーをつけなかったり、いろいろ注意することが必要だとわかりました。

練習は、朝7時から8時30分までトレーニングを行いました。毎日トレーニング内容が違うことに、よく考えてあると感心しました。大学でもトレーニングをしますが、練習が終った後少しするくらいで、トレーニングの時間を1時間半ももうけてあるので、筋肉痛は、毎日ありました。もっとウエイトトレーニングとか、サーキットトレーニングなどをしなくては、とつくづく感じました。

ジャカルタのジュニアチームの練習を見て、みんなネット前の処理がじょうずだと思いま


トレーニングにはげむ地元選手


ハルトノと久郷クン


西山クンはトレーニング器具に〝マイッタ〟

した。ネットの一番高いところでシャトルをとらえているからです。私などは、上でとれるシャトルも下でとってみたり、直さなければならない点がたくさんあります。

フットワークにしても、むだな動きが多いことに気づきました。

もっと基本を確実にマスターし、手首の使い方をじょうずにしたいと思います。

今後、インドネシアで学んだ事をもとにしてがんばりたいと思います。

（日本体育大学2年）

強い足腰とリスト

野口英代

初めての海外遠征ということで、インドネシア空港に着いた時は期待よりも不安で胸がいっぱいでした。

第1日目の午後には、インドネシアチームの練習を見学し、そのあと日本チームが練習しました。インドネシアチームの人達の練習を見て感じたことは、バドミントンを本当に楽しそうにやっているのです。やらされるからやるのではなく、自分から進んでやるといった感じでした。しかもコートは、3面やっと取れるせまい体育館の30度を越える暑い中で、プレーしているにもかかわらず、汗はかいているものの、まったく疲れた様子を見せないのです。足腰の強さ、リストの強さにも驚かされ、それは次の日からの練習に参加してその理由がわかりました。

朝は7時～8時30分までトレーニングで、フットワークを含んだダッシュ、インターバル、レクリエーション的なトレーニングを組み合わせ、集中した練習でした。

2週間の中で、1日だけウェイトトレーニングをしましたが、すばらしいトレーニングルームがあり、いろいろな機具がそろっていました。ほとんど日本と変わりない方法で行なわれましたが、軽いバーベルを使ったリストの強化は初めてでした。インドネシアチームの人達が使っていた重さのバーベルで手首を動かそうと思いましたが動かせないのです。インドネシアチームとのリストの強さの違いを、はっきり知らされました。

午後は6時～8時までシャトル打ちでほとんど基本練習でした。クリアー、ドロップを打ち、ダブルスのサービスラインまでもどるとか、スマッシュを打って、ネットの2対1とか、〝打ったら前〟という練習が多かったのが印象的でした。こんなところから、インドネシアの人達のネットぎわのプレーの速さが生まれるのだと思いました。

数えあげればきりがないほど、インドネシア遠征は私にとって大きなプラスになったと思います。

この遠征で得たことを参考に、がんばっていこうと思います。

（日本体育大学1年）

上から下へ叩くラケット

原田純子

成田空港発、香港経由で、夜ジャカルタに着きました。

約2週間というもの、ずっとホテル住まいだったので、一番心配していた食生活の面でも、不便を感じずにすみました。

1日目は、午後4時から2時間、インドネシアチームの練習を見学し、6時から2時間私たちの練習が始まりました。

体育館は、3面コートが取れますが、ひとつも窓がなく、練習中一回は電気が消えたり付いたりしました。

2日目からは、朝の練習も始まりました。朝の練習は、シャトルを打つということがなく、〝走る〟ということが主で、その他は、ウェイト・トレーニング、サーキット・トレーニング、インターバル・トレーニングなど、1時間30分の短い時間でしたが、集中した練習です。

トレーニング室には、バドミントンで必要な筋肉を鍛える機具がたくさん揃っており、とくにリストの強化など、とてもきつい練習でした。インドネシアの人達と同じ回数だけの練習は、とてもできませんでした。

午後の練習は、シャトルを使って基本的な部分練習です。スマッシュやカットを打った後、クロス前に走ってネットの上でシャトルを捕える練習をしました。インドネシアのコーチは、常にネットプレーの打点を高くするよう何度もいっておられました。

ラケットワークを比べても、日本とインドネシアは違います。日本の場合、ネット前は、ラケットを下から上に振り上げますが、インドネシアでは、下から上のラケットワークはないようです。

長いようで短い2週間でしたが、試合も、ナショナルチームの練習見学もでき、

（日本体育大学1年）



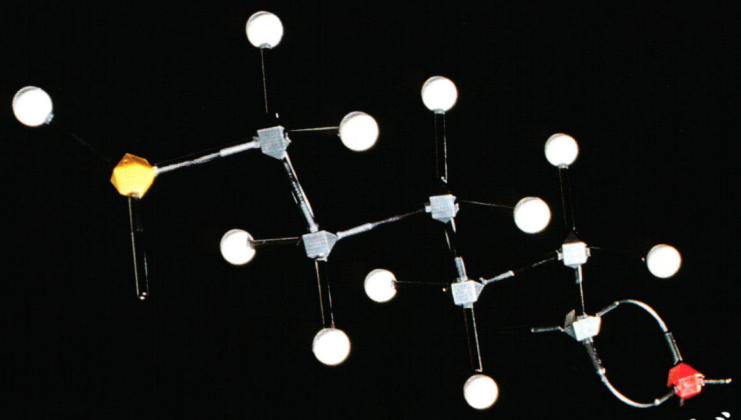
いま、鮮烈のプロショップ

RACKETSHOP Motomachi

ラケットショップ元町

◉横浜 Tel:5F/045-651-2020・045-662-9857 4F/045-662-7133◉渋谷Tel:03-400-7390◉池袋 Tel:03-988-0215◉吉祥寺Tel:0422-21-7890◉藤沢Tel:0466-26-2552◉町田Tel:0427-28-6050

ザ・サイエンスガット。



科学がガットに生命を吹き込んだ。



ハイ・オー・シープ
¥700

ハイ・シープ
¥450

ウインテックス・カーボン
¥800

ゴーセンが生んだインターナショナルブランド、ハイ・シープ®。ナイロンガットの可能性を徹底的に引きだした、ひとつの頂点。打球感、反発力、耐久性、コントロール性。極限を超えた、科学の結晶。ナイロンガットではない、これはもうサイエンスガットだ。トップブランドとしての誇りを持って、コートの上で暴れ続ける。

さらに、ハイ・シープ®の技術力をベースにしたサイエンスガット群が、バドミントン界を震撼させる。

破壊力ある豪快なショットを可能にするウインテックス®・カーボン。

特殊油入り中空糸とワイヤー巻きつけの技術が生んだ驚異の瞬発力を持つガットなど……。

個性光って、10タイプ。すべてのガットに、科学が生命を吹きこんでいる。

コートの上でその生命力は爆発する。実感して欲しい。

★ガットのGOSENの文字をお確かめのうえお買い求めください。

道具がプレーを変える

GOSEN

株式会社 ゴーセン

本　　社 ● 〒540 大阪市東区豊後町4　☎ (06)942 5816代
東京支店 ● 〒111 東京都台東区竜前4-14-2　☎ (03)862 6576代
福岡営業所 ● 〒810 福岡市中央区薬院1-4-8　☎ (092)712 5247代
北陸営業所 ● 〒921 石川県金沢市横川7-22　☎ (0762)47 0200代

ずらり、4店勢揃い。

渋谷店

760㎡（230坪）の広々とした店内でゆったりショッピング。

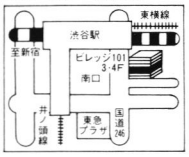


バドミントンコーナー



毎月曜日定休

東京都渋谷区桜ヶ丘町1-7（ヒレッジ101ヒル3-4階） TEL03-464-9251〜2 〒150
●営業時間/午前10時〜午後7時30分
●日曜・祭日は午後7時まで

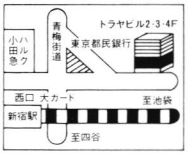


新宿店

落ち着いた雰囲気でお買いもの。各階それぞれの楽しさがいっぱい。

毎月曜日定休

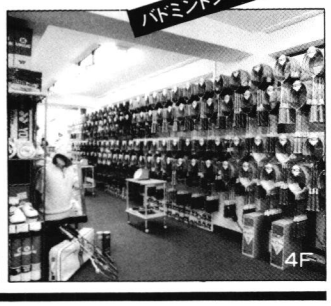
東京都新宿区西新宿7-10-20（トラヤビル2・3・4階） TEL03-363-6848 〒160
●営業時間/午前10時〜午後7時30分
●日曜・祭日は午後7時まで







バドミントン・フロア

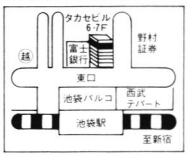


池袋店

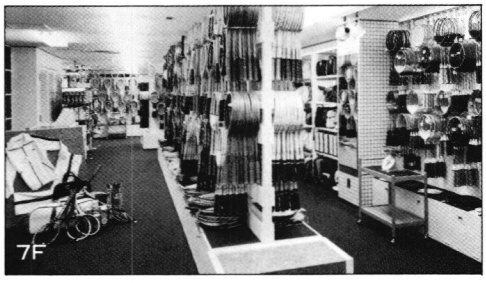
つぶ揃いのテニス、バドミントン用品が店内にあふれんばかり。

毎月曜日定休

東京都豊島区東池袋1-1-4（タカセビル6・7階） TEL03-989-0401 〒170
●営業時間/午前10時〜午後7時30分
●日曜・祭日は午後7時まで



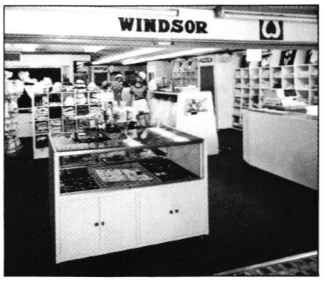




横浜店

ラケット、ウェア、シューズ……すべてに豊富な品揃え。選びやすい各コーナー。



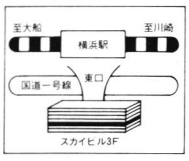


男性ウェア・コーナー



年中無休

横浜市西区高島町2-1 横浜駅東口（スカイビル3階） TEL045-453-1785 〒220
●営業時間/午前10時〜午後8時
●日曜・祭日も午後8時まで



日本最大のテニス・バド専門店
WINDSOR RACKET SHOP

伝統のマーク WINDSOR ウインザー ラケットショップ。





グラファイトシリーズ

エイトシックス　B-86
グラファイトシャフト・グラファイトフレーム／黒(ケース付)
フレーム価格 13,000円

エイトツウ　B-82　フレーム価格 9,000円

エイティ　B-80　フレーム価格 8,500円

kawasaki
河崎ラケット工業株式会社



カワサキ アドバイザリー プロ スタッフ　相沢マチ子

いま世界に拡がる新しい打球サウンド

みがきぬかれた高度のテクニックと、時速250kmのスピードを競う世界のビッグトーナメント。白熱のコートで、続々と栄冠を勝ちとるエイトシックス。
トッププレーヤー絶賛の軽さと、強じんさ。そして、最新の打球サウンドを、あなたも体験してください。

初めての合宿で"鉄の団結"



シャンティツク・バドミントン・クラブ

九月の連休を利用して我々、横浜シャンティックバドミントンクラブは、上手な方はよりうまく、そうでない方はそれなりの期待と不安を胸に秘め、第一回の合宿を山中湖で、行うこととなりました。

集合時間六時半、集合場所周辺は、横浜カーニバルと重なったためか、お互いを見つけるのが、ひと苦労、「あっ来た、来た」、「あっ違っちゃった」。それでもどうにか定刻を遅れること三十分、横浜を出発、一路山中湖へ。途中、車内は蜂の巣をついたような大騒ぎ。

そうこうしてる間にバスは山中湖へ到着。ひと休みして、明日からの打ち合せを終り、就寝となるのでしたが、なかにはバスの中の興奮がさめやらず、夜中、突然おきだし、ラケットを持って、湖畔で素振りをした人が、いたとかいないとか。



朝モヤをついて走る（後方に約１名、足をひきずっている人がいます）

こうして合宿一日目の夜は更けてゆくのでした。

眠い目をこすっての六時起床、そしてランニング、昨夜の騒ぎはなんのその、平均年齢ンオは若いのだ？

朝食をすませて、体育館へ。清々しい空気の中に響く打球音のすばらしさ、基礎打ち、反面シングルス、ノックなど参加会員も加え午後は一段とはりきり、用意してきたスポーツドリンクもすぐ底をつくありさま。

ふだんは違う職場で働く者同士が、ダブルスを組み、シャトルを通して球友を深めあった一日の練習でした。

宿に帰ってからは、おまちかねの野外でのバーベキュー。練習中さえなかった人もこの時ばかりとハッスル、みんな、あれだけ運動



まず素振りの練習から



練習後のひととき（風呂上がりの人も約１名）

したあとなのに、若いんですね精神年齢が。

なかにははしゃぎすぎて、一躍、近くの民宿に来ていた女子大生達のアイドルとなり、エルビス・オン・ステージをする人も出たりして、たいへんな一日でした。

とうとう合宿最終日。

「六時ですランニングしますよ」という声に、「し〜ん」。

だから年を考えなさいというのに。いつまでもあると思うな若さと体力。

それでも完走したのは、男子三名、女子二名、うち男子一名は、走るたびに吐いていました。

あとの会員は山中湖の朝もやとともに、どこかに消えてしまったようです。

体育館では、初め三組にわかれてのバスケットボールで体ならしのつもりが、ほとんどの人が、「腰が痛い、足が痛い」と悲鳴にならない悲鳴。それでも、紅白にわかれてのバドミントンの対抗試合は、熱のこもったいい試合の連続でした。

午後二時、家族やこれなかった人におみやげを買い、思い出の山中湖を出発。さすがに疲れたらしく、シートに深々、腰かけてただ眠っている人ばかり。途中、渋滞のため、午後八時に無事、横浜帰着。

全員、自宅へ帰宅かと思えば、その日の十時から仕事にいく人もいたりして、本当に楽しい合宿、本当にオツカレサマデシタ。

シャンティック・バドミントン・クラブは、6年ほど前に平沼バドミントン・クラブの名で結成され、ラケットショップ元町に集まる有志の人々によって発展してきました。そして、昨年11月に、大きく育ったのを機会に名前を代えようということになり、全員で案を出しあった結果、インドネシア語で〝素敵だ〟という意味の〝シャンティック〟に決定しました。

現在会員は約50名、ラケットショップ元町のかたがたにコーチをお願いしており、初心者から上級者までバドミントンを通じて親睦をはかっています。そして今回初めての合宿を実施し、予期以上の成果を上げることができました。

（会費・練習などについてのお問合せは、ラケットショップ元町横浜店
☎045−662−7133まで）

気合い十分、睡眠不十分





世界のトーアが贈る
バドミントンガットシリーズ



レオイナ　ホーン
LEOINA HORN S



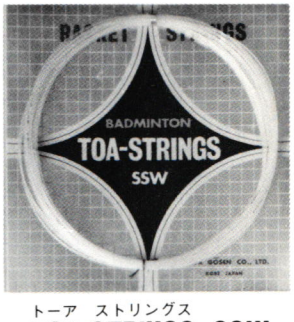
グラファイト　レオイナ
GRAPHITE LEOINA 66



レオイナ　シープ
LEOINA SHEEP 66



トーア　ストリングス
TOA-STRINGS SSW



トーア　ストリングス
TOA-STRINGS SSW

東亜合繊株式会社

〒651　神戸市葺合区八雲通３－１－25

☎078(232)1991(代)

昭和55年度関西学生新人戦

8・29〜9・11☆大阪

川嶋（近大）、北田（四条畷）が二冠王に輝く

700余名のフレッシュマンが大熱戦！

8月29日から9月11日までのあいだの9日間、大阪市立淀川体育館、大阪府立臨海スポーツセンターにおいて、関西学生バドミントン新人戦が行なわれました。

参加人数、男女合わせて約700名という、このマンモス大会を勝ち抜き、名実ともにチャンピオンの座に輝いた、フレッシュマンたちの戦いぶりを、ここにお伝えします。

◇男子シングルス

▼準決勝

川嶋（近大） 2（12—15, 18—15, 15—11）1 西岡（仏大）

滝川（大経） 2（15—12, 15—6）0 乾（天理）

▼決勝

川嶋 2（15—7, 12—15, 15—11）1 滝川

（川嶋は二連勝）

（評）

ベスト8に3人の選手を送りこんだ、近大勢の活躍が光った。とくに堀江（1年）は、はつらつとしたプレーでベスト8まで勝ち進み、大会を盛りあげた。

また、今大会優勝候補の筆頭である川嶋（2年）は、持前のガッツあるプレーで、準決勝、決勝と、ファイナルゲームの接戦を勝ち抜き、二連覇を成しとげた。

一方、敗れたとはいえ、西岡、滝川の健闘ぶりも、賞賛に値いしよう。とくに西岡は、第1ゲームを取り、第2、第3ゲームも、終始押し気味に試合をすすめ、川嶋をあと一歩に追い詰めた。今後の両者の対戦が、楽しみである。

◇男子ダブルス

▼準決勝

玉田 平井 2（10—15, 15—11, 15—7）1 豊田 毛利（京都）

川嶋 近藤 2（15—11, 15—10）0 村尾 松田（同大）

▼決勝

川嶋 近藤 2（15—12, 15—10）0 玉田 平井

（川嶋・近藤組は初優勝）

（評）

玉田・平井組が大活躍し、注目された。玉田の配球のうまさと、平井の力強さがうまくかみ合い、勝ち抜くごとに調子をあげ、乾・藤井（天理）豊田・毛利（大経大）の上位シードを連破した。

しかし、決勝は地力と気力にまさる、川嶋・近藤が、波に乗る玉田・平井を降し、初優勝に輝いた。川嶋は、単・複を制し、二冠王となった。

◇女子シングルス

▼準決勝

北田（四条畷） 2（11—1, 11—3）0 冨田（四条畷）

青山（四条畷） 2（11—3, 11—0）0 福田（四条畷）

▼決勝

北田 2（11—2, 11—9）0 青山

（北田は初優勝）

（評）

予想どおり、四條畷勢が、ベスト4を独占した。初戦から、他校の選手をまったくと言っていいほど寄せつけず、圧倒的な強さで勝ち抜いてきた。

第一シードの新谷（竜大）も、善戦及ばず、田（1年）に敗れ去った。なかでも、実力ナンバーワンの北田（1年）は、学生離れしたストロークと、試合運びで、順当に優勝を飾った。

◇女子ダブルス

▼準決勝

冨田 青山 2（15—5, 15—3）0 西岡 四ツ井（大体）（四條畷）

北田 福田 2（15—1, 15—4）0 南 水口（甲南女）（四條畷）

▼決勝

北田 福田 2（15—5, 15—6）0 冨田 青山

（北田・福田組は初優勝）

（評）

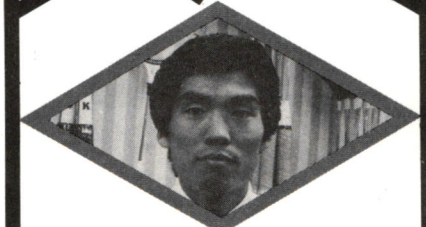
シード選手が、順当にベスト8に勝ち残ったが、シングルス同様、四條畷勢と他校の差は、年々広がるばかりのようだ。

四條畷同士の決勝は、一方的な勝負で、かたがついた。

北田は、一年生としては、初の二冠王に輝いた。

（関西学連記）

チャンピオンをめざせ！ 1



銭谷欽治

先月号にも述べたように、私がバドミントンを始めたのは高校へ入学してからだった。

中学からの先輩や、村西先生の勧めでクラブへ入部したのが5月、まずそれからの高校生活半ばまでの体験をごく簡単に話してみたい。

入部してしばらくの間は、コートサイドで線審をしながら見学ばかり、シャトルに触れる時間といえば練習が終わる間際の10分か15分間、使い古しのシャトルでロングサービスの練習だった。来る日も来る日も、シャトルを打つのはロングサービスだけ。あとは1年生の特別メニューのトレーニング。近くの山まで走って階段を10数往復、オーバーヘッド、サイドハンド、アンダーハンドの素振りをフォア、バックとあらゆる角度から手がマメだらけになるまでやらされた。

大聖寺高校は、普通科の進学校だったため、練習時間は放課後の2時間程度、あまり豊富な練習時間とはいえないが、それでもほとんど毎日、元旦と合宿明けの日を除いて年中無休で続けられた。

入部して1ヵ月は、この相手コートのバケツを狙ってのロングサービス一辺倒だったが、ラケットを握って間もないことと、ほとんど羽根のないシャトルを使っていたため、的になるバケツにはなかなか入ることがなかった。

6月になると、ロングサービスがいよいよハイクリアーにかわった。

ラケットの長さも、グリップもしっくりしないのを「力まないで」「軽く握って」というアドバイスを聞きながら直していったように記憶している。

もうこの頃には、10分程度の羽根打ちではもの足りず、打ちたくて打ちたくてウズウズ、朝早く友人と誘い合って学校へ行き、欲求不満を解消させたりしたものだ。

そして同じようにバドミントンに対する知識欲も次第に旺盛になってきたのもこの頃だった。先輩のプレーを食い入るように見ては、何でも吸収してやろうと思い、また早くああなりたいと思った。

当時は、打つ時間が短かくて不満に思ったものだが、今になってみれば、かえってなまじ練習をするよりも、意欲の充電、エネルギーの貯蓄になったようだ。

中途半ばな意欲のまま体を動かすより、放たれる矢が十分に引き絞られるように、一気に爆発できる体勢を知らず知らずのうちに作られていたような気がする。教えられるより〝学ぼうとする気持〟の育成をいつの間にか施されていたわけだ。

7月に入るとカット、後半にはスマッシュと、ようやくバドミントンの基本が進んでいき、8月に3年生が抜けてからは打つチャンスも多くなり、ノックの雨を浴びることになった。

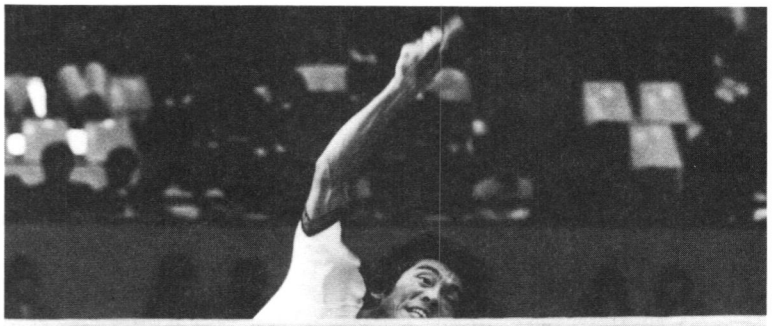
ノックといってもそれは種類も多彩で、机の上から角度をつけて打ってくるもの、攻撃練習のためのもの、守備練習のためのもの、ダブルスのためのもの、シングルスのためのものと、練習の主体がノックといっても過言でないほどノックの日々が続くことになった。

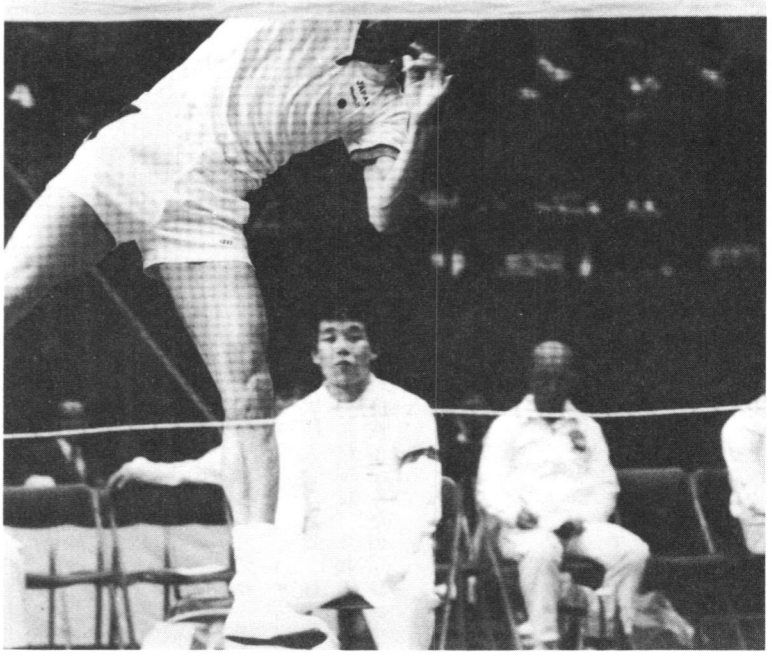
秋を迎え、新人戦の季節には1年生の仲間10人が5人となったものの、やめていく人の気持がわからないほど、バドミントンに対する意欲はエスカレートする一方で、同級生のうちただ一人の中学からの経験者に、早く追いつけ、早く追い越せの一心だった。

その当時のプレーぶりは、とにかく上がったらスマッシュを打つしか能がなく、よく打つ割

には「蚊とんぼが止まる」といわれ続けていた。本人としては、決めよう決めようと必死になっていたのだが……。

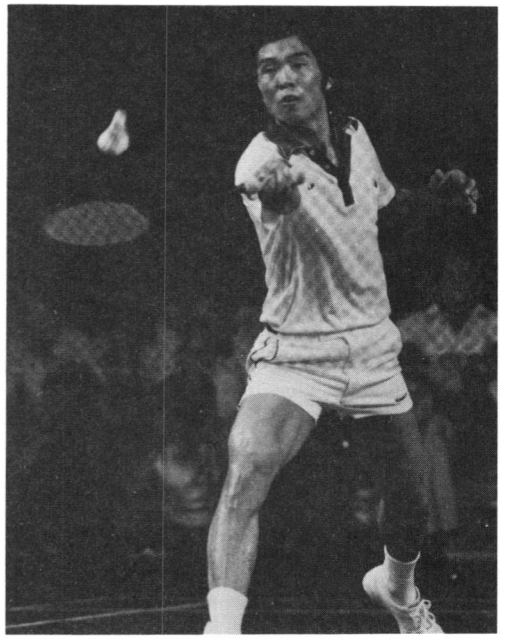
何はともあれ高校時代の練習の記憶をたどるとそこにはノックによる基本練習、半面でのオールショート、オールロング、2対1で基本と、1年中基本に明け暮れていたようだ。





ここ数年、私は海外遠征に恵まれ、外国の選手をつぶさに見るチャンスを与えられているが、〝基本〟に対する外国選手の考え方、姿勢というものが、日本選手とは若干異っているような気がする。

それは、試合前のウォーミングアップに顕著に出ているが、日本選手がクリアーからカット、ドライブ、スマッシュといった具合いにひと通りのストロークをこなさないと調子をつかむのに苦労するのに比べ、外国プレーヤーはいきなりスマッシュやドライブを打ったり、極端に短時間のうちにまるで遊んでいるかのような仕草で肩ならしを終えてしまうことだ。



しかし、インドネシアなどの基本の反復練習は、日本の比ではないほど驚異的にこなしているし、中国にしてもしかりだ。

そのインドネシアの選手にして、日本選手より自由な雰囲気で基本を打っているのを、どう解釈したらいいのだろうか。

私はそこに、あまりに基本のための基本になっている日本の姿を見るような気がする。

基本といえども、あくまでゲームのための基本、勝つための要素でしかない。ネットをはさんだ長方形のコートに、技の制約はないのだ。

先駆者の知恵は、その勝つための近道として基本を作り上げたにすぎない。基本の修得に固執するあまり、バドミントンゲームの本質から離れ、頭の中までがんじがらめに縛られているのではないか。

体には、より以上の基本の修得を覚え込ませ、頭の中は空っぽで自由なままでいたい。

最近、私はそんなことを思うことがある。

高校時代を思い浮かべると、基本に次ぐ基本で体に覚え込ませてくれたうえに、意欲という無形のもので固定観念をいだかずにすんだこと、つねにゲームと結びつけて教えてくれた村西一先生、多くの先輩の方々に感謝するばかりである。

第9回ユーバー杯防衛戦へ向けて

「中国遠征強化合宿」で飛躍ねらう

"女王"湯木、"新星"北田は不参加

第9回世界女子バドミントン選手権（ユーバー杯）大会は、来年5月22日から31日までの日程で行なわれる。

日本は過去8回のうち、第4回～6回、第8回と4回優勝しており、次回も優勝への最右翼ではあるものの、インドネシアの成長が著しく、またイギリスも初の獲得をねらって激しい強化をつづけている。リーン・コーペン、キルステン・ラーセンの二枚看板をもつデンマークもインターゾーン出場をねらって虎視眈々の様子である。

日本としては、今年の全英選手権、世界選手権ともに〝無冠〟に甘んじており、選手・関係省の間には、しだいに危機感・焦燥感が見られるようになってきている。

この現状を打開し、脱皮への足がかりとするため「中国遠征強化合宿」を実施することとなった。

日程は10月3日から12日までの10日間。詳細は未定だが、スピード、パワーで世界一、二を争い、さきの日中大会でその実力をいかんなく発揮した中国から得るものは大きいと思われる。しかし、その一方、正味一週間では、かえって疲労するばかりで、環境・食事なども考え合わせると、マイナス面が大きいのではないかという危惧も隠せない。

また、日本の第一人者、湯木博恵（河崎ラケット）がメンバーからもれているのも注目される。これが今回の合宿に限っての措置なのか、それとも〝女王抜き〟でユーバー杯を防衛しようというのか、日本協会の真意は不明である。

次回大会からは、従来の4複3単形式から、トマス杯同様、4複5単形式で2日がかりの対抗戦となるため、シングルスの比重が増すことになる。

久々の大型新人ということで期待の大きい北田スミ子（四条畷短大）もメンバーにはいっていないため、シングルスの層の薄さは否定できないところである。

かりにインターゾン出場国を、イングランド、インドネシア、マレーシア、カナダに想定すると、それぞれのシングルスの有力選手は次のようになる。

1イングランド　ジェーン・ウェブスター、カレン・ブリッジ、カレン・チャップマン、S・J・リードビーター。

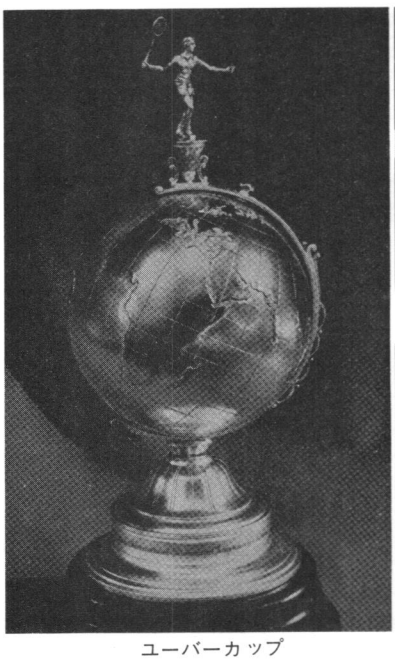
2インドネシア　ベラワティ・ウィハルジョ、イバナ・リー・イン・ホー、タティ・スミラ、チャン・ソー・ガン。

3マレーシア　チペ・ゴク・ウィー、カオ・ムー・レオン、カテリナ・テ、レオン・チャイ・リーン。

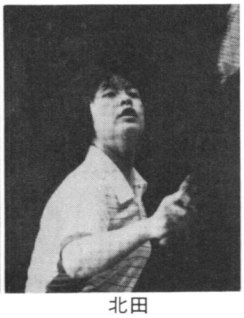
4カナダ　ウェンディ・カーター、ジェーン・ヤングバーグ、J・ファラデー。

このうち日本が注意しなければならないのは、いうまでもなくイングランドとインドネシアである。シングルス5試合のうち、やはり3試合をとることが大切であり、第3シングルスの比重がかなり大きくなる。〝湯木抜き〟ということになれば、日本としては徳田あるいは近藤が第3に回ることになると思われるが、チャップマンあるいはリードビーター、タティ・スミラあるいはチャン・ソー・ガンから確実にポイントをあげられるだろうか。さらにもしイングランドにギリアン・ギルクスが復帰するようなことになると、事態はさらに深刻となる。

ユーバー杯という大勝負のさい、ベテラン


ユーバーカップ


湯木


北田

の力がいかに頼りになったかは、過去の例をみれば明らかである。

第5回大会決勝（東京）　第1シングルスで湯木が敗れたが、つづく中山（当時高木）が完勝して流れを日本に向けた。

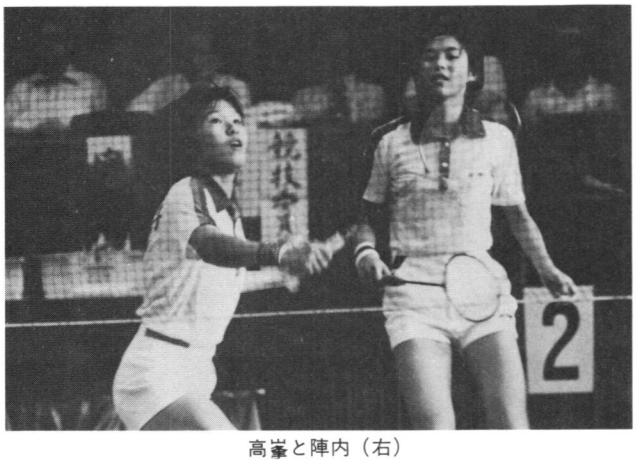
第6回大会決勝（東京）　第1シングルスで高坂が敗れたが、つづく湯木、中山が連勝した。

第7回大会決勝（ジャカルタ）　2―5でインドネシアに敗れたが、この2ポイントは湯木と中山のシングルスだった。

現在の力からみて、当日の調子いかんでは湯木ならば第1、第2シングルスへの起用も十分可能であろう。

若手の育成という長期的視野に立っての高峯、陣内の合流であるならば、北田をも加えるべきではかろうか。

いずれにしても、旅費・滞在費ともすべて日本負担というきびしい条件で遠征する以上、実りある成果を期待したい。とくに、日本の将来を背負っていくべき高峯、陣内の両選手は帰国早々、栃木国体という強行日程ではあるが、若さを武器に、中国から血となり肉となるものを身につけて帰国してほしいものである。


高峯と陣内（右）

⊙「中国遠征強化合宿」
▽日程＝10月3日～12日
▽場所＝中国北京市、上海市ほか
▽監督＝小飼栄一（日本バドミントン協会副理事長）
▽コーチ＝池田信孝（電電東京）
▽選手
1 徳田敦子（サントリー）
2 高田幹子（サントリー）
3 近藤小織（河崎ラケット）
4 米倉よし子（電電東京）
5 東海林文子（サントリー）
6 大塚ソノエ（ヨネックス）
7 高峯和子（熊本中央女子高3年）
8 陣内貴美子（熊本中央女子高2年）
▽総務＝伊藤鉱一（日本バドミントン協会常務理事）

⊙第9回世界女子バドミントン選手権（ユーバー杯）大会
▽日程（案）
レセプション＝昭和56年5月21日
1回戦＝5月22日～23日
準決勝＝5月23日～24日
〃　＝5月26日～27日
国際バドミントン連盟総会＝5月28日
〃　理事会＝5月29日
決勝＝5月30日～31日
▽試合形式
第1日＝$S_1 \times S_1$、$S_2 \times S_2$、$D_1 \times D_1$、$D_2 \times D_2$、
第2日＝$S_1 \times S_2$、$S_2 \times S_1$、$S_3 \times S_3$、$D_1 \times D_2$、$D_2 \times D_1$
▽会場＝京都、名古屋、東京（予定）
▽組合せ＝完全抽籤制

第18回関東バドミントン選手権大会　横須賀

工藤（栃木）宮森（東京）に快勝

高校は豊田（神奈川）屋代（神奈川）の2年生に栄冠

第18回関東バドミントン選手権大会は、第35回国民体育大会の関東地区予選会を兼ねて、8月28日から31日まで、神奈川県の横須賀市総合体育館と久里浜体育館を会場に開かれた。

国体には男女ともナショナルチームは出場できないため、日本を代表するプレーとはいえなかったが、男女とも高校生から壮年の部（40歳以上）まで、熱戦を展開した。

◆一般男子シングルス

▽3回戦

池田（神）2―0村上（栃）
牧野（茨）2―0笠井（神）
今井（群）2―0細谷（茨）
工藤（栃）2―0鏑木（群）
遠藤（東）2―0大石（栃）
阿部（埼）2―1栗原（群）
宮森（東）2―0佐々木（神）
管（神）2―0秋庭（群）

▽準々決勝

池田	2			
	15	15	8	
	15	8	15	
			1	牧野
工藤	2			
	15	7	11	
キケン			15	
			1	今井
阿部	2			
	15	0	12	
	15		15	
			1	遠藤
宮森	2			
	15	15	12	
	15	10	15	
			1	管

▽準決勝

工藤	2			
	15	15		
	15	3		
			0	池田
宮森	2			
	15	15		
	7	3		
			0	阿部

▽決勝

工藤	2			
	15	15	8	
	3	12	15	
			1	宮森

◉ベスト4入りで惜しかったのは牧野。それぞれ1ゲームずつを取ったファイナル、牧野はサウスポー特有の逆カットとクロススマッシュを決めて10―3と大きくリードした。ねばりを身上とする池田もペースをつかめず、大苦戦。ハイクリアーを中心にドロップショットとハーフスピードのスマッシュでラリーをつないだが、牧野は勝ちを意識してか、ペースが速くなり、無理打ちが目立ち、池田のばん回を許し、結局は10から一本も取れず惜敗した。

その他の三試合もすべてファイナルゲームとなり、工藤×今井戦も激しい戦い。ともに長身からの攻撃を武器に積極的な試合運び。第1ゲーム中盤から今井はスピンのきいたショートサービスに切り換え、工藤のミスを誘って先取した。

しかし、第2ゲームにはいると今井に疲労の色が濃く、いったんは棄権の意志表示をしたが、気を取り直してゲームを続行。工藤は無理な攻撃をひかえ、今井を引き離してタイに追いついた。ここで今井もついに試合を断念し、工藤はからくもベスト4へ進出した。

宮森と管は、さきの全日本実業団大会の個人戦でも対戦しており、管にとっては雪辱戦。五分五分の試合展開から、第3ゲームも接戦。10―13から12―13まで管が追い上げたが、あと一歩及ばず、宮森はベスト4へと駒を進めた。

準決勝は池田が直前のダブルスで100分に及ぶ熱戦を経てきたため、集中力を欠き、一方的に敗れ去った。一方の阿部も前日までの気力がなく、宮森の攻撃の前に完敗。

決勝は、まず宮森が先行した。鋭角的なスマッシュとスピンのきいたヘアピンを軸に押しまくり、工藤をリード。

一方の工藤は、第2ゲームからしだいに調子を上げ、ミスの少ない堅実なプレーに終始した。宮森は迫力ある攻めはさすがと

思わせたものの、ミスがあまりにも多く、自滅の形でファイナルゲームへともつれ込んだ。追いついて意気上がる工藤に対し、ストレートで決着をつけることに失敗した宮森は心身ともにガックリと落ち込み、第3ゲームはいいところなく敗れ去った。

◆一般女子シングルス

▽準々決勝

端（東）2―0山沢（栃）
渡辺（東）2―0海賀（栃）
高岸（東）2―1上野（栃）
沢内（東）2―0青山（群）

▽準決勝

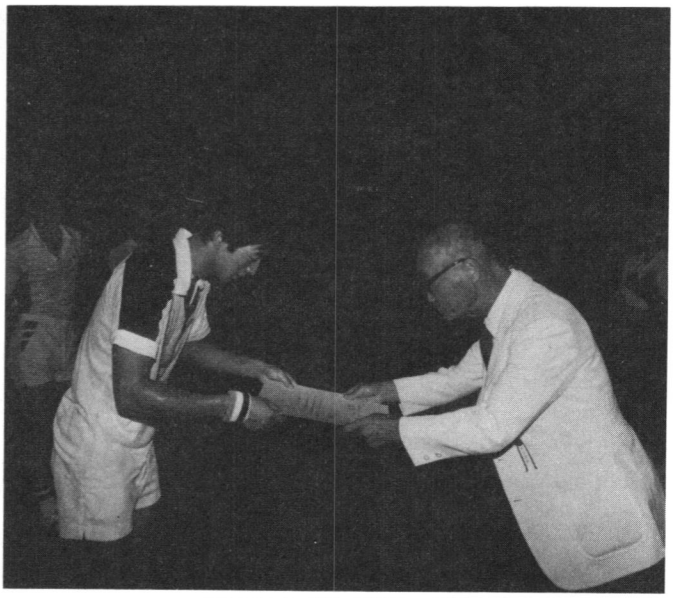
端 2（11―1 11―1）0 渡辺
沢内 2（11―6 キケン）0 高岸

▽決勝

端 2（11―6 11―6）0 沢内

⊙この種目のベスト4はすべて東京（河崎ラケット）勢ということで、お互いに手の内を知りつくしており、内容的にはいま一つということになった。

新人（東女体大出）の高岸は活躍が期待されたが、対沢内戦で足首を捻挫し、途中棄権。盛り上がらないまま、端が優勝した。



一般男子シングルス優勝。工藤吉彦

◆高校男子シングルス

▽3回戦

峰（埼）2―0高橋（埼）
本田（神）2―0藤野（千）
大塚（栃）2―0長谷川（東）
豊田（神）2―0飯塚（山）
佐藤（東）2―0加藤（栃）
岩崎（群）2―0斉藤（埼）
上村（茨）2―0儘田（埼）
松野（山）2―0杉山（神）

▽準々決勝

峰 2（ ）0 本田
豊田 2（15―4 15―3）0 大塚
佐藤 2（15―9 15―12）0 岩崎
松野 2（15―8 15―3）0 上村

▽準決勝

豊田 2（15―9 15―7）0 峰
松野 2（ ）0 佐藤

▽決勝

豊田 2（15―10 15―5）0 松野

⊙インターハイベスト4の松野と同じくベスト8の豊田、ともに2年生同士の対戦ということで、お互いにライバル意識むき出しの決勝となった。

豊田は長いリーチできれいなレシーブをみせ、冷静な試合運びで松野に対した。一方松野は積極的に攻める戦法となったが、豊田の陣は固く、豊田が先取。

第2ゲームにはいると、豊田は声を出し、打って前にふみこむプレーをみせ、高い位置でのヘアピンとうまく配球を散らし、一方的にリードを奪い、逃げ切った。

地元ということもあって、豊田の気力充実したプレーぶりは好感がもてた。これからも小手先のテクニックに頼らず、オーソドックスなプレーを心掛けるなら、将来性十分といえよう。

◆高校女子シングルス

▽3回戦

岡安（東）2―0進藤（千）
三沢（栃）2―0佐藤（千）
屋代（神）2―0佐々木（東）
佐野（埼）2―0山田（埼）
熊沢（神）2―0新井（埼）
北崎（茨）2―1中島（埼）
吉田（群）2―1白井（千）
猪瀬（栃）2―1川口（埼）

▽準々決勝

岡安 2（11―3 11―8 7―11）1 三沢
屋代 2（11―3 11―9）0 佐野
熊沢 2（11―7 11―0）0 北崎
吉田 2（11―0 11―9）0 猪瀬

▽準決勝

屋代 2（12―9 11―1）0 岡安
吉田 2（11―4 11―2）0 熊沢

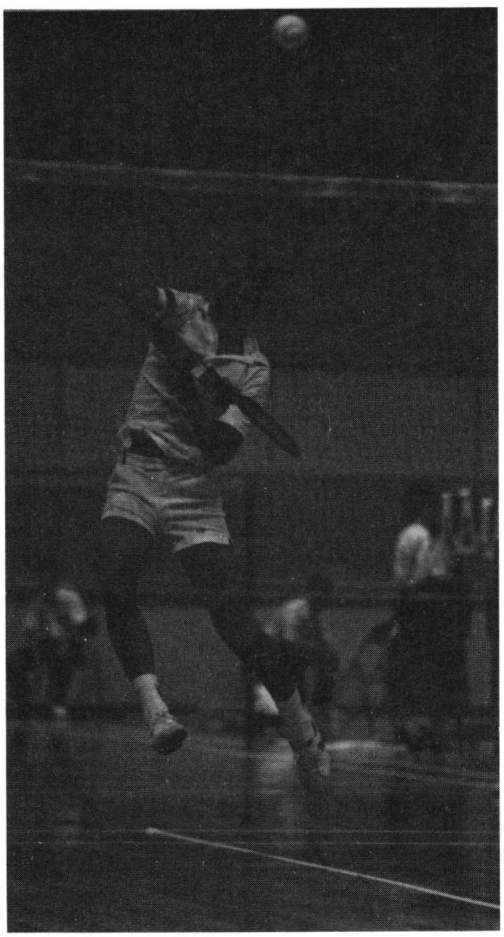
▽決勝

屋代 2（11―0 12―9）0 吉田

⊙屋代（やしろ）は2年生とは思えぬコート度胸で勝ち抜き、恵まれた体軀からのスマッシュ、ドリブンクリアーも効果的で決勝へと駒を進めた。

一方の吉田は、すばやいフットワークと強気一本の攻めで、決勝へと名乗りをあげた。

第1ゲームはそれぞれ持ち味を生かしてポイントを重ね、セッティングとなった。ここで一気に抜け出した屋代は、第2ゲ



鋭いスマッシュを放つ豊田

ームも好調にポイントしたのに対し、吉田は集中力を失い、それまでの強気な攻撃もカゲをひそめ、なんとラブゲームで屋代の軍門に降った。

この二人の他には、やはり2年生・長身（168センチ）の熊沢が目についた。長身選手にありがちな下半身の弱さをしだいに克服し、大きく成長してきた。しかし、準決勝ではウォーミングアップ不足から、いいところなく敗れ去った。コートにはいる前からすでにゲームは始まっていることをよく考え、今後に生かしてほしい。

◆一般男子ダブルス

▽準々決勝
今井・栗原（群）2―1宮森・林田（東）、管・栗（神）2―1秋葉・平（神）、秋庭・鏑木（群）2―1遠藤・山村（東）、高橋・池田（神）2―0細合・佐藤（茨）

▽準決勝

今井	15―2			
栗原 2	15―2	0	管	
			栗	
秋庭	15―12			
鏑木 2	17―18	1	高橋	
	18―17		池田	

▽決勝

今井	15―3			
栗原 2	15―7	0	秋庭	
			鏑木	

⊙準決勝の秋庭・鏑木対高橋・池田の試合は、まさに手に汗をにぎる一戦だった。秋庭のスピンサーブから攻撃に徹する群馬ペアに対し、神奈川ペアはじっくりシャトルをつなぎ、コート四隅をたんねんに突く作戦。

第1ゲームは、秋庭・鏑木の攻めのきびしさが勝ったが、第2ゲーム、ようやく球筋の見えてきた高橋・池田がけんめいにつなぎ、チャンスを待って攻め立てるという一進一退の末、ファイナルへと決着は持ちこされた。

迎えた第3ゲームも第2ゲーム同様の展開となり、マッチポイントを先に奪ったのは高橋・池田組。秋庭のすばやいプッシュをしのぎ、ラリーをつなげるがどうしてもあと一本が取れない。そうするうちに4オールに追いつかれた。群馬ペアもスピンサーブでなんとか勝負をつけようとするがラチがあかず、最後は、秋庭がウェストぎりぎりのドライブサーブでポップアップを誘い、100分に及ぶ熱戦にケリをつけた。

この試合で秋庭・鏑木組は燃焼しつくし、決勝は秋庭のケイレンも手伝って、あっという間に終了。今井・栗原組は意外な楽勝でタイトルを獲得したが、実力的にも十分ナンバーワンにふさわしいものをもっていた。

◆一般女子ダブルス

▽準決勝
渡辺・沢内（東）2―0上野・海賀（栃）、端・高岸（東）2―0山沢・植竹（栃）

▽決勝

渡辺			
沢内	不戦勝	端	
		高岸	

◆高校男子ダブルス

▽準々決勝
佐藤・長谷川（東）2―0赤沼・内田（茨）、高橋・斉藤（埼）2―0豊田・杉山（神）、大浦・中村（埼）2―0原・奈良（神）、田口・岩井（東）2―0峰・儘田（埼）

▽準決勝

佐藤	15―8		
長谷川 2	18―15	0	高橋
			斉藤
大浦	18―13		
中村 2	15―4	0	田口
			岩井

▽決勝

大浦	15―10		
中村 2	15―13	0	佐藤
			長谷川

◆高校女子ダブルス

▽準々決勝
岡安・長岡（東）2―0白井・進藤（千）、熊沢・折田（神）2―0吉田・中島（群）、北村・吉野（群）2―1飯塚・堀内（神）、川口・佐野（埼）2―0佐々木・小林（東）

▽準決勝

岡安	15―6		
長岡 2	15―5	0	熊沢
			折田
川口	15―5		
佐野 2	15―5	0	北村
			吉野

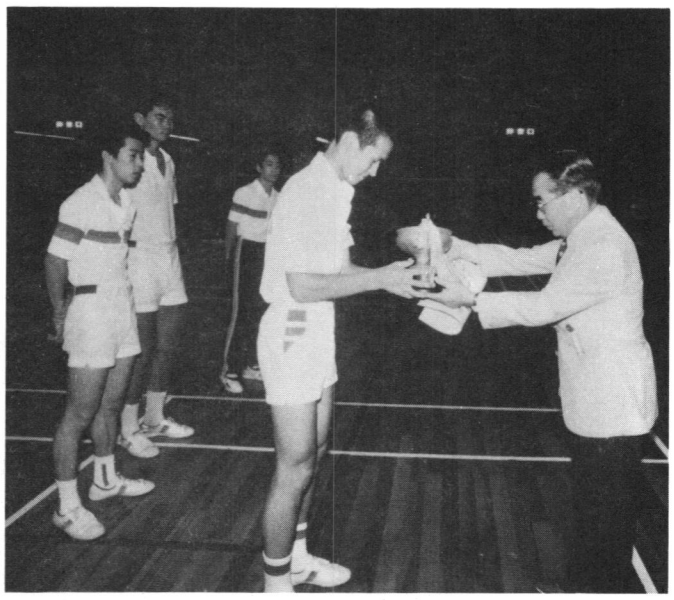
▽決勝

川口			
佐野 2	15―5	1	岡安
	15―10		
	11―15		長岡

◆30歳男子シングルス

▽準々決勝
鈴木（神）2―1小柳（千）
杉田（神）2―0松井（東）
大原（東）2―0古明地（東）
桜田（神）2―0渡辺（神）

▽準決勝



高校男子シングルス優勝・豊田　裕

西野・渡辺（東）2―0岡田・立花（埼）　森本・田中（東）2―0飯塚・千葉（神）

▽決勝

西野 2（15―9 15―11）0 森本
渡辺　　田中

◆40歳男子シングルス

▽準決勝

田中（千）2―0杉田（東）
吉野（東）2―1柳田（東）

▽決勝

田中 2―0 吉野

◆40歳男子ダブルス

▽準決勝

杉山・吉野（東）2―0藤川・花岡（東）、小川・鈴木（東）2―0柳田・斉藤（東）

▽決勝

杉山・吉野 2―0 小川・鈴木

◆40歳女子ダブルス

▽準決勝

水口・白倉（東）2―0佐藤・平本（東）、五十嵐・前田（東）2―0増田・柿沼（群）

▽決勝

五十嵐・前田 2―1 水口・白倉

鈴木 2（15―10 15―2）0 杉田
桜田 2（15―6 15―1）0 大原

▽決勝

鈴木 2（15―4 15―2）0 桜田

◆30歳男子ダブルス

▽準々決勝

町田・大原（東）2―0金井・千葉（群）、渡辺・金子（神）2―1小山・宮本（神）、古明地・鈴木（東）2―1島田・千葉（東）、杉田・京屋（神）2―0松井・菊地（東）

▽準決勝

渡辺 金子 2（17―14 15―9）0 町田 大原
杉田 京屋 2（17―14 15―8）0 古明地 鈴木

▽決勝

渡辺 金子 2（15―6 15―6 9―15）1 杉田 京屋

◆30歳女子ダブルス

▽準決勝

インドネシア学生遠征 こぼれ話

今月号で紹介しましたように、学生チームがインドネシアに遠征しましたが、事前の予定とは多少の変更があり、合同練習会という形になりました。しかし、かえって実り多く内容も充実したようです。

練習内容、各人の印象などは16ページ以降をごらんいただくとして、ここでは〝こぼれ話〟を――。

＊

帰途はシンガポール経由でしたが、その2日間は選手たちにとって、きびしい合宿の後だけに、とりわけ楽しい思い出となったようです。

東南アジアで買い物をする場合は、値切るのが一種の儀式のようなもので、相手の言い値で買うようなことはしません。シンガポールも例外ではなく、大いに〝かけひき〟を楽しんだようです。

○○サンは、3000ドルという指輪を、なんとたったの20ドルまで値切るという離れわざを演じました――もっとも結局は買わなかったのですから、たいしたものです。

また△△クンは、値切っているうちにすっかりノドがかわいてしまい、店の人に冷たいジュースをサービスさせていました。

××さんは、二軒の店を行ったり来たりして、〝向うはいくらだった〟といって、店同士で競争させ、そのあげく店員と記念写真をとっただけで手ブラで帰ってきました。

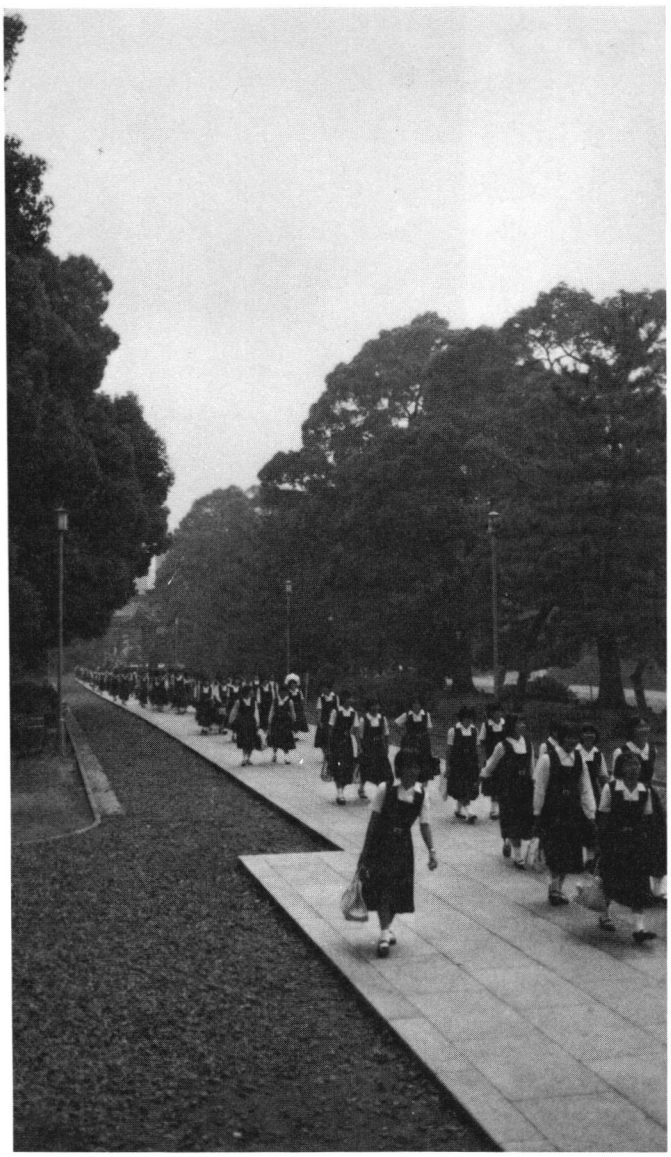
その代わり、わずか5分で行けるところを、タクシーで30分も回り道されたメンバーもいたそうで、なかなか話題豊富だったようです。

インドネシアでのきびしい練習はもちろん、このシンガポールでの生活も忘れられない、というのが全員の共通した感想でした。

◇◇クンなどは、〝1年ぐらい、ここに住んでみたいなあ〟といってタメイキをついていたそうです――。

恵まれた環境と設備が自慢　鶴見女子中学・高等学校

現状突破をめざし はりきる



鶴見女子中・高等学校は、国電の鶴見駅を降りて、鶴見大学の校舎を通りぬけ、曹洞宗大本山・総持寺の石だたみを歩いて10分ぐらいの、小高い丘の上にあります。

教室からの景色は、すばらしいもので、天気の良い日などは千葉県の房総半島までも臨むことができます。周りは工場などもなく、静かな環境で、授業を受けやすく、設備もよいのです。

なかでも体育館は、バスケットボール、バレーボール、バドミントンが、一緒に練習できるほどの広さです。天井の高さも、バドミントンのは、十分な高さがあり、ブラインド、二〇〇メートルの屋内ランニングコースなどの設備もあります。

そのうえ、バスケットボール、バレーボール専用の体育館＝地下一階のサブA、ダンス・卓球専用の体育館＝地下二階サブBもあります。

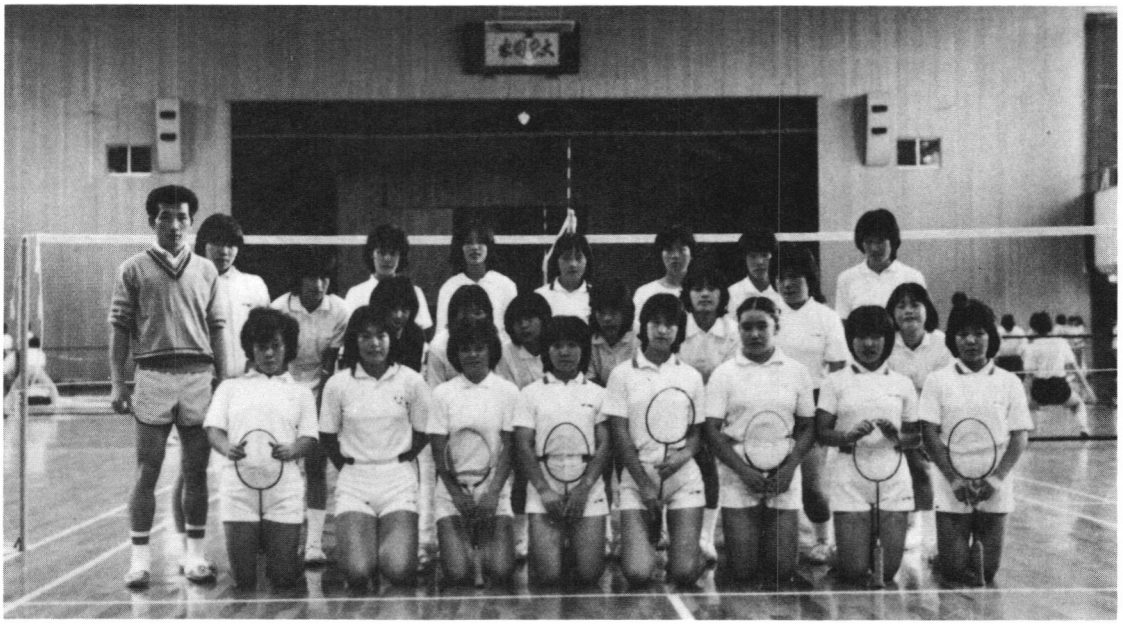
私たちバドミントン・クラブは、一週間のうち六日間はコート三面を使用しています。日曜日などは六面使用することもあります。練習は、といえば、どこの学校もやっているでしょうが、ランニング・柔軟・基本、そして、ノックや半面の2対1・オールロングやオールショートなどです。

練習後には、〝あさらし〟一往復と、〝うさぎとび〟往復がまっています。日曜はその他に、ダッシュ20本をやります。日曜日や、夏休み中は、九時半から五時半まで練習で、今年は、練習試合が多く、みんなもいろいろと、勉強になったようです。

合宿は4泊5日で、長野に行きました。バスで約十時間。そしてやっと着いたと思ったらすぐ練習開始。朝から夕方まで、シャトルを追うだけの毎日でした。けれどこの合宿で、みんな一回りも二回りも大きく成長しました。

合宿最終日に、新しい部長・副部長が決まり、私たち2年生が、リードしていくことになりました。そして、その責任の重さを改めて知りました。顧問の先生方も、たいへん熱心に指導してくださり、みんなもそれにこたえられるよう、一生懸命がんばっています。

現在は、主に二人の先生が見てくださいます。その中でも、国体に出場、関東選手権で





単・複ともベスト4、オールジャパンに出場するといったベテランの先生もいらっしゃいます。いずれの先生も、生徒と一緒になってやってゆくという先生なのです。だから、私たちも信頼してついてゆけるのです。

「高2・高3になってまで、よくクラブに専念できるね、勉強は？」と聞かれることがあります。私たちの学校は、高校・大学へは、エスカレーター式で行くことができるので、受験を気にせずに、部活に励めます。だからといって勉強を、おろそかにしているわけではありません。それに、中学・高校だけでなく、大学に入学してからも同じような設備の中でバドミントンをすることができます。

現在、部員は約40人と多く、毎日活気に満ちています。しかし、中学生が6人しかいません。そのため、試合などにクリアーも飛ばないような初心者を出さなければならない、ということもあります。

しかし、卒業した先輩、今、忙しい時間であるのに高3の先輩が、いつも出てきてくださいます。本当に、私たちは恵まれていると思います。

いつでもコートに入ってシャトルを打つことができるので、コートに入っている時間を、大切にしていない、といわれることがあります。でも、私たちはコートに入ればみんな一生懸命やっています。コートに入れば、プレーヤーは一人です。どんなに応援されても、結局、戦うのは自分です。甘えていれば、勝つことはできません。和気あいあいとしていますが、そういう点では、キリッとしています。

そうはいっても、なかなかうまくはいかないもので、ここ五年間ぐらいは、県大会で、ベスト8～16の間をいったりきたりしている、といった状態なので、今年こそは、それ以上の成績を、とみんなはりきっています。

まだまだ未熟ではあると思うし、学ぶことが、たくさんあります。私たちは、毎日の練習でプレーを向上させるのはもちろん、人間的にもしっかりと成長していかなくてはいけないと思います。

WORLDWIDE TOPICS

海外トピックス
友枝康子

ユーバー杯地区予選組合せ決まる

第9回世界女子バドミントン選手権（ユーバー杯）大会へ向けて各国とも動きが活発になってきましたが、各地区予選の組合せが決まりました。

それによりますと、なんといっても激戦区はヨーロッパゾーンで、イングランドとデンマークが、それぞれインターゾーン進出をかけて熾烈な闘いをくり広げると思われます。

▼ヨーロッパ・ゾーン
▽1回戦
スコットランド×台湾
スウェーデン×オランダ
（イングランドとデンマークは1回戦シード）

▼オーストラレイシア・ゾーン
▽1回戦
ニュージーランド×インドネシア
オーストラリア×インド

▼パン・アメリカン・ゾーン
▽1回戦
ペルー×アメリカ
（カナダは1回戦シード）

▼アジア・ゾーン
マレーシアのみ出場

※いずれも最初に記載されている国が開催地を決定できる。

右の4地区の代表とチャンピオン国日本が、ユーバー杯をかけて、日本で5月に対戦するわけです。

台湾がヨーロッパ・ゾーンへ、インドネシアがオーストラリア・ゾーンへ転出したため、マレーシアは自動的にインターゾーン出場が決まりました。

インターゾーンの組合せは、間もなく決まりますが、代表国が出そろうのは来年3月末の予定です。インターゾーンは完全抽選による組合せのため、日本としてもいきなり強国と当る可能性もあるため、しっかりとしたスケジュールによる強化を進める必要に迫られています。

ビッグイベントのスケジュール

ビッグ・イベントのスケジュールが決まりました。昨年の第1回オープン・マスターズ大会以来、賞金つきの大会がふえてきましたが、左記の大会にもほとんど賞金がかけられるもようです。金額等については、いまのところ不明です。

1 ベルズ・スコッチ・ウイスキー選手権大会＝10月10日～12日、スコットランド・パース
2 ペプシ・コーラ・カナダ選手権大会＝10月28日～11月1日、エトビコーク
3 アウラ・オープン大会＝11月22日～23日、スウェーデン・マルメ
4 ランダース選手権大会＝11月28日～30日、デンマーク・ランダース
5 コペンハーゲン・カップ＝1月3日～6日、コペンハーゲン
6 オランダ・オープン選手権大会＝2月14日～15日、ベイババイク
7 ドイツ・オープン選手権大会＝3月6日～8日、ミュールハイム
8 デンマーク・オープン選手権大会＝3月12日～15日、コペンハーゲン
9 スウェーデン・オープン選手権大会＝3月17日～20日、マルメ
10 全英選手権大会＝3月25日～29日、ウェンブレー

IBF認定プレーヤー名簿

オープン化にともない、各大会に賞金がつけられるようになると、選手としてもIBF（国際バドミントン連盟）の認定を受け、賞金を自分の手にするようになってきました。

現在のところ日本では認定プレーヤーはいませんが、各国の認定プレーヤーが発表になりましたのでお知らせします。

▼イングランド（男子）
テビッド・エディ、ケビン・ジョリー、レイ・スティーブンス、エディ・サットン、デリク・タルボット、マイク・トレジェット

（女子）
ギリアン・ギルクス、ノラ・ペリー、バーバラ・サットン、ジェーン・ウェブスター

▼デンマーク（男子）
フレミング・デルフス、モルテン・フロスト・ハンセン、J・モルテンセン、スヴェン・プリ、ステーン・スコブガード

REGISTERED LICENSED PLAYERS

（女子）
リーン・コーペン、アン・スコブガード

▼オランダ（男子）
H・リーデルマイヤー、ロブ・リダー、G・バン・デル・ブラクト
（女子）
ヨーケ・バン・ビューセコム、H・デ・コート、マーヤン・リダー

▼スウェーデン（男子）
トーマス・キールストロム

▼スコットランド（男子）
W・ジリランド
（女子）
ジョアンナ・フロックハート

▼アメリカ（男子）
J・D・ベル、W・ベリー、E・D・ブラディ、T・カーマイケル、S・ホールズ、C・キナード、J・E・ライブ、P・マキャリック、D・マンツ、R・J・パーク、J・R・プール、H・L・シービー、R・ウィット、J・D・リグルスワース
（女子）
P・L・ブラディ、C・L・カートン、J・ケリー、U・D・キナード、A・ルート、V・L・タウツ

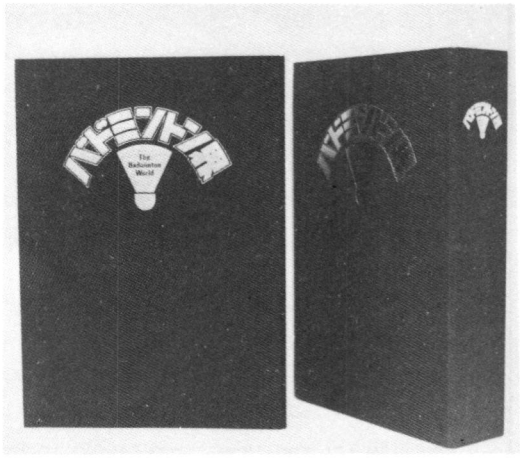
以上のようにヨーロッパのおもだった選手は、ほとんど認定されています。しかしインドネシア、マレーシアのアジア圏とカナダはふくまれていません。

形のうえでは〝純アマチュア〟ですが、インドネシアの有力選手は事実上のステート・アマチュア（国家がかかえる一経済的にも社会的にも一選手）ですし、共産圏も同様です。

また、バドミントンの賞金はテニスなどに比べたら雲泥の差で、賞金だけで生計を立てるのは無理です。したがってスポーツ用品メーカー等と契約したり、みずからの名前を冠してスポーツ店を経営するなどの選手がほとんどです。

ビョルン・ボルグのような選手の出現は当分ありえないでしょう。

専用合本バインダー 定価改訂のお知らせ



本誌は毎月発行ごとに保存しておけば，バドミントンの百科辞典となるものです。そのために本誌１年分12冊を，穴をあけたり，ノリを使ったりすることなく，かんたんに，しかも長い年月にわたって保存しておくことのできる“**専用合本バインダー**”をつくってまいりました。

しかし，用紙，レザーをはじめとする資材の値上りにより，このたび定価を**１冊 700円**に改定させていただきます。まことに申し訳ありませんが，ご了承のほどお願いいたします。〔本誌綴じ込みの振替用紙には旧定価＝500円と印刷してありますが，**訂正のうえ**ご利用くださるようお願いいたします〕

〈バドミントン界専用合本バインダー〉
表紙＝黒色レザーにタイトル銀パク押し
金具＝特殊クリップ使用
送料＝１冊500円、３冊まで850円、４冊以上すべて1000円
お申込み方法＝１冊定価 700円に，送料を加えて，本誌巻末とじ込みの振替用紙に必要事項を明記のうえ，お近くの郵便局からお申し込みください。

ルが打たれても，目がすぐ飛び出したシャトルを追わず，一瞬はインパクトの地点に残るようにします」。

in イン。 ボールまたはシャトルが「コート区域内に入っている」(within the boundary lines of a court or field) という意味で，打球がライン上に落ちたかどうかの判断が必要とされる時に使われる言葉。「入っている」場合は主審は「イン」とコールする。入らなかったというジャッジなら「アウト」とコールする。ラインはコート区域の一部なので，ライン上に落ちた打球は当然「イン」である。

このことは競技規則14「フォルト」の(e)項(日本語版では第5項)の末尾に，カッコ付きで次のように説明されている。

"(A shuttle falling on a line shall be deemed to have fallen in the court or service court of which such line is a boundary.)"「境界となっているラインの上に落ちたシャトルはそのコート，サービスコートの内に落ちたものとする」

☞ out (アウト)

inning イニング。 サービスを持ったサイドが最初サービスしてから，そのサービス権を失うまでの攻撃期間。シングルス・プレーでは，一方のサイドに許されるサーブの試技は1回だけであるから，サーブ後，ラリーに負けてしまえば，サービス権は相手側に移る。ダブルス・プレーでは各ゲームの最初のサービスだけはシングルス同様1本だけ，第2イニング (相手側にサービス権が移った最初のイニング) 以降は2人のプレーヤーが失権するまでサーブを続けることが出来る。

このinningという言葉は英国で生れたクリケット，それを米国人が改良した野球で「チームの攻撃の順番 (回数)」という意味で使われており，その概念がバドミントンにも引き継がれた。この語は「in＋ing」が結びついたもので，inは"get in"または"go in"で「(攻撃に)参加する，入る」こと。つまりinningは「ただいま攻撃中」というのが原義とされている。

なおinningの綴りはnが2つ続いているからといって「インニング」と発音しないよう気をつけること。

in plan インプレー。 簡単にいうと「プレー中」ということになるが，これは「試合中」と同義語ではない。試合が始まってから終了するまでの時間の中には競技規則または運営規則等に基いて，合法的なプレーの中断(または休憩) などが含まれているからである。一方「インプレー」は現にプレーが進行しており，バドミントンでいえばシャトルが飛び交い，ラリーが続いている状態を指す。

これをWebster's Sports Dictionaryは次のように説明している。"In racket games such as tennis, squash, or badminton, the ball or shuttecock is in play only from the moment it is served until the point is decided or a fault or let occurs."「テニス，スカッシュ，バドミントン等のラケット競技では，ボールまたはシャトルがインプレーの状態にあるのは，サーブが打たれた瞬間に始まり，ポイントが決まるか，フォルトもしくはレットが生じるまでの間に限られる」。

インプレーがなぜ問題になるかといえば，バドミントンの場合，シャトルにある状態が生じた時，それがインプレー中であるか否かによって，フォルトか否かが分かれるためである。たとえば競技規則第14条「フォルト」の第6項では「『インプレー』のシャトルを，ネットを越える前に打返したとき」，第7項では「『インプレー』のとき，プレーヤーのラケット，身体，着衣がネットやそれを支えるものにふれたとき」は，いずれもフォルトであると規定している。

しかしながら，第19条「一般規定」では次のように述べている。「プレー中にシャトルがネットに当たってひっかかったり，ネットに当って打った人の方のコート面に落ちようとしたり，コート外のコート面にふれた後で，相手がラケットや身体でネットやシャトルにふれても，そのときはシャトルは『インプレー』ではないから罰はない」。

これは，シャトルがネットに当たったことにより「フォルト」が生じ，その瞬間，シャトルがインプレーではなくなった (インプレーの逆を「アウトオブ・プレー」という) ため，プレーヤーがラケットや身体でシャトルにさわっても，フォルトの対象外である，という意味である。

In side イン・サイド。 単に"in side"とも書くが，英語版のIBFの競技規則(The Laws of Badminton)は，第5条「プレーヤー」で次のような書きかたをしている。

The side for the time being having the right to serve shall be called the "In" side, and the opposing side shall be called the "Out" side.

これを日本語版は次のように訳している。「『イン』サイドとはサーブする権利を持っている間，そのサイドをいう。『アウト』サイドとはインサイドの相手サイドをいう」。

以上で「イン・サイド」の意味もわかってもらえただろう。この「イン」は，さきに「イニング」の項で説明したように「攻撃」のことである。なお，inとsideを続けて"inside"と書いてしまうと「内側の」という全く違った意味になるから注意が必要。発音は"In side"は最初のインにアクセントがあり，"inside"は後のサにあるから区別しなければならない。 (Iの項つづく)

バドミントンの用語ABC

後藤忠弘／編

Hの項 つづき

holding ホールディング。 ホールドは、あるものを一定の状態に保っておく、というのが原義であり、強盗のせりふ“Hold up”も「両腕を上げて、上げたままにしておけ」ということである。

スポーツで使われるホールディング（保つこと）にはふた通りあり、ひとつはシャトル、ボールなどがラケットに接触後、瞬間的に打ち返されず、一時、打面の上に保たれ、動かない状態になること。もちろん、一時とはもののたとえで、実際上は“一瞬”にすぎないだろうが、それでも、厳密な一瞬よりは時間的に長く、ラケット打面上にシャトルがとどまることがある。フォルト（その項参照）である。

もう一つは、チームゲームのフットボール、ホッケー、水球などで、相手選手のプレーを手、腕、スティックなどで邪魔し、動かせないこと。これも反則である。

☞ fault（フォルト）

home position ホーム・ポジション。 略してホームとも，base of operations(ベース・オブ・オペレーションズ。作戦基地の意味)ともいう。Webster's Sports Dictionaryの定義を紹介してみる。

“A spot on the court in court games from which a player has the best chance of reaching an opponent's shot.”（コート競技におけるコート上の1点で，そこからだと，相手からの打球がどこに飛んで来ても，最も早く到達できるような場所。）つまり，具体的には自分側のコートの二つの対角線の交点に相当する，コート中央部のこと。

ここからは自コートの四つのコーナーまでは等距離にある。したがって，コートをひとりで守るシングルスでは，1球打ったら，すぐこの場所に戻ることが肝要である。もし戻り切らないと，そのために生れたオープン・スペース（コート上の空地）を，相手の次の打球で襲われることになる。この意味で，シングルスのゲーム展開は，相手をホーム・ポジションから追い出すための争いということになる。ダブルスでのホーム・ポジションは，いわゆるフォーメーションということになる。

なお，ホームはもちろん，家庭，故郷などの意味だが，副詞として使い「十分に，深く，急所に」等の意味がある。

例 He thrusted it home.（深々と突き刺した。）

また，形容詞のホームリィ(homely)には，家庭的な，質素なということのほか，「(女性の)きりょうが悪い」意味もある。

☞ formation（フォーメーション）

（hの項終わり）

Iの項

IBF アイビーエフ。 International Badminton Federation(インターナショナル・バドミントン・フェデレーション）すなわち国際バドミントン連盟の略称。1934年7月，カナダ，デンマーク，イングランド，フランス，アイルランド，オランダ，ニュージーランド，スコットランド，ウェールズの9ヵ国協会の代表がロンドンに集って設立した。初代会長は「トマス杯」生みの親でもある英国のジョージ・トマス卿。現会長（1976～）は11代目でスウェーデンのステラン・モリーン氏。日本は1952年（昭和27年）3月に21番目のメンバーとして加盟した。現在の加盟国は約60で，ほかに仮加盟が少々ある。世界的には，まだそれほど大きい国際組織とはいえず，とくにアフリカ，南米，東欧圏では未発達である。

主催している国際競技会はトマス杯，ユーバー杯，世界選手権の三つ。体質的にはテニス競技の影響を受けて西欧の“伝統主義”を守っており，中国の加盟問題をめぐって組織が分裂（中国が一部の加盟国に呼びかけて別個にWBF＝World Badminton Federationを結成。1978年）した。しかし，昨年来，IBFとWBFの間には和解への話合いが進められている。

impact インパクト。 衝突する，物体の衝突や出現によって他に衝撃や影響を与える，というのが本来の意味で，動詞，名詞両様に使われる。スポーツ用語としてはラケット，クラブ，バットなどでボールやシャトルを強くたたくこと。しかし，それよりもっと広く，ラケットとボールやシャトルが出合う(meet)，接触する(contact)，打球する(hit)という言葉の代わりに使われることも多い。

例 Your eyes should remain on the point of impact for a moment after the actual stroke.（Judy Hashman：Starting Badminton）「シャト

オリジナルTシャツをどうぞ



☆特価 1200円

〔送料〕 1枚＝200円、4枚まで450円、8枚まで650円、9枚以上800円 〔全国均一〕

サイズS，M，L

「バドミントン界」のオリジナルTシャツができました。

白地にブルーで，「バドミントン界」のマークと，Guts & Fair Playの文字をプリントしたものです。

定価は1500円ですが，愛読者の皆様には，1200円に割引きとなります。上記の送料をプラスして，巻末とじ込みの振替用紙に枚数とサイズを明記のうえ，お近くの郵便局からお申し込みください。 バドミントン界編集部

編集室から

▼社会人大会で男子はほぼ予想どおり、女子は4強が激烈な闘いをくり広げました。原口、関根、東海林といったメンバーも力をつけてきており、このままユーバー杯防衛戦に向けてがんばってほしいものです。

▼インドネシアへ遠征した学生チームも元気に帰国しました。受入れ側のつごうでスケジュールが変更になるなどヤキモキさせましたが、大きな成果を身につけたようです。今後のプレーぶりに注目しましょう。

▼今月からいよいよお待ちかねの、現役チャンピオン銭谷選手の〝チャンピオンをめざせ〟が始まりました。〝若獅子〟からヒントをつかみ、毎日の練習に生かしてください。

▼毎月、多くの愛読者カードをありがとうございます。やはり、トレーニング方法や、練習スケジュールのガイドをご希望の方が多いようです。理論にとらわれない、〝実戦的〟な手引きをいろいろな形で実現していきますので、お楽しみに!!

バドミントン界 The Badminton World

1980年10月号 ©1980年 通巻第132号

写真植字／サカキバラ写植
印刷・製本／根岸印刷

◇本誌の記事・写真等を許可なく転載・複写することを禁じます

定価＝300円 1年間予約購読料＝3000円(送料共)
振替＝東京8－10737

昭和55年10月15日発行
編集兼発行人／赤星三樹
発行所／赤星出版株式会社
東京都目黒区鷹番2－8－22－205 〒152
☎03－712－6952



人間速射砲 リム・スイ・キン ヨネックスと契約

テニス、バドミントンの総合メーカー、ヨネックススポーツ㈱は、8月1日同社東京本社に於て、'79バドミントン世界ランキング第1位・リム・スイ・キン選手（インドネシア）と全世界における使用契約を締結したと発表した。

この契約によりヨネックスのバドミントン界における世界戦略は、本年度メジャータイトルチャンピオン（スウェーデンオープン、デンマークオープン、全英選手権、ワールドカップ、ETC）のすべて（男子）と契約選手としたことになり、テニスにおけるキング、ナブラチロワとの世界契約とあわせ、テニス、バドミントン界の頂上を独占しそうな勢いである。

ヨネックスとの契約についてリム・スイ・キンは、「ヨネックスと契約できて非常に満足している。これからは単に試合に使用するだけでなく、よりよい製品づくりに積極的に協力していきたい」と強調した。また、「ヨネックスラケットの性能と、安定したハイクオリティーがヨネックスを選んだ第一の理由である」との言葉に対し米山社長は「すべて自社生産・管理に基づく高品質の安定供給という我社の姿勢が認められたのだと思う。ヨネックスとしても今回の契約を単に使用契約にとどまらず、互いのノウハウを出し合うことにより、広い意味でバドミントン界全体の発展に貢献できることを願っている」と語った。

リム・スイ・キンは、今後の目標として「一戦一戦を大事に戦い、最大の目標は全英選手権である。また世界各国でヨネックスの広報活動の担い手になっていきたい」と語った。

この契約、世界超一流選手の手に日本製品が持たれるということは、それだけ日本製品の優秀性が認められているという証明であり、「メーカーはどうあるべきか」という問題の答えがそこにあるのではないか。

何はともあれ、テニス、バドミントン界で日本（製品）が世界を制する。何とも痛快なことではないか。

なお、契約内容はラケット、ウェア、シューズ、その他の全製品の全大会使用で、期間は3年間となっている。

その横顔

●年齢　1956年2月28日生まれ　24歳

●主な戦績　'74インドネシア男子単優勝　第7回アジア大会代表　'75インドネシア男子単優勝　第3回世界招待試合単優勝　'76全英選手権単2位　トマス杯代表　'77スウェーデンオープン単優勝　全英選手権単2位　'78第8回アジア大会代表　全英選手権単優勝　'79全英選手権単優勝　トマス杯代表　ワールドカップ'79単優勝　アジア大会単優勝　'80全英選手権単2位　第2回世界選手権単2位

〈プロフィール〉

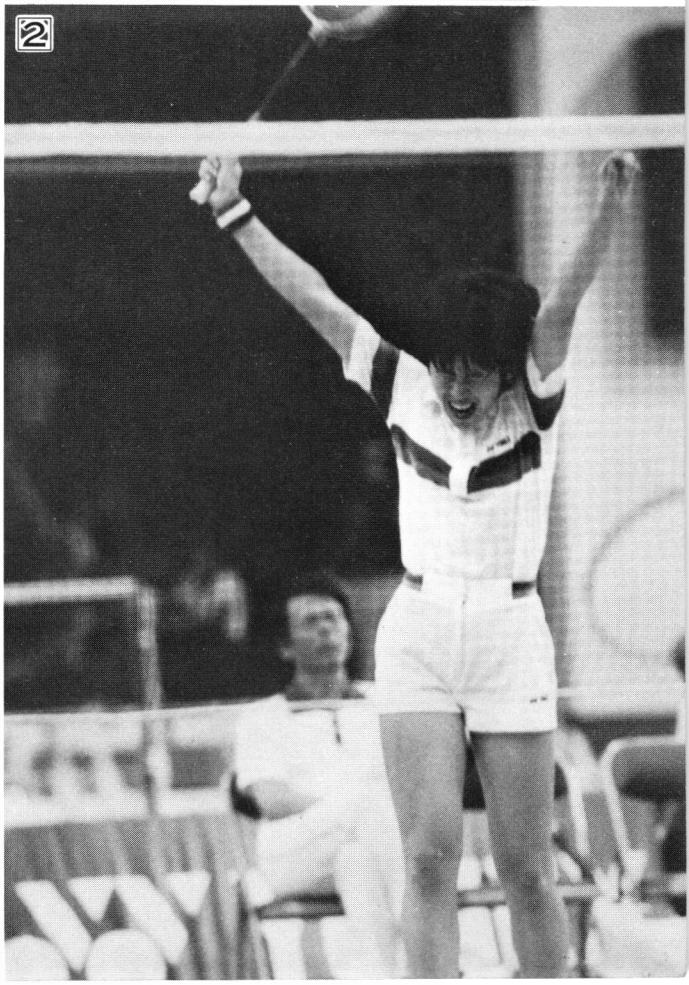
'75マレーシアのクアラルンプールで行なわれた第3回世界招待試合で世界にデビュー。19歳で優勝を飾り、ハルトノ（8年間ナンバー1の座に君臨していたインドネシアの大エース）の後継者としてインドネシアが国をあげて期待したが、大試合になると弱い面が出て、'76、'77と全英選手権は決勝で敗れる。しかし'78にハルトノを破り全英に優勝して以来、全英2連勝、ワールドカップ2連勝、特に'77から'80にかけ2年半の間無敗という記録が示すように〝KING OF KINGS〟〝バドミントン界のスーパースター〟として世界に君臨している。

その天性ともいえる素晴らしいダッシュ力、完璧なボディバランス、敏しょう性に富む軽い身のこなしに加え、ネットより浮いたタマはすべて叩くという腕のすくような攻撃、目にもとまらぬ必殺のジャンピングスマッシュと、そのプレーは「黒豹」とも「人間速射砲」とも異名をとり、地元インドネシアはもちろん全世界が目標とするスーパースターである。

インターハイのドラマから


1


3


2

第31回全国高等学校選手権大会（いわゆるインターハイ）は、先月号で既報のとおり、男子団体戦は比叡山高校、女子は熊本中央女子高校が優勝し、個人戦でも井上哲章（熊本商大付）高峯和子（熊本中央女子高）、山本裕幸・馬杉武司組（比叡山高）高峯和子・陣内貴美子組（熊本中央女子高）が栄誉をかちとりました。

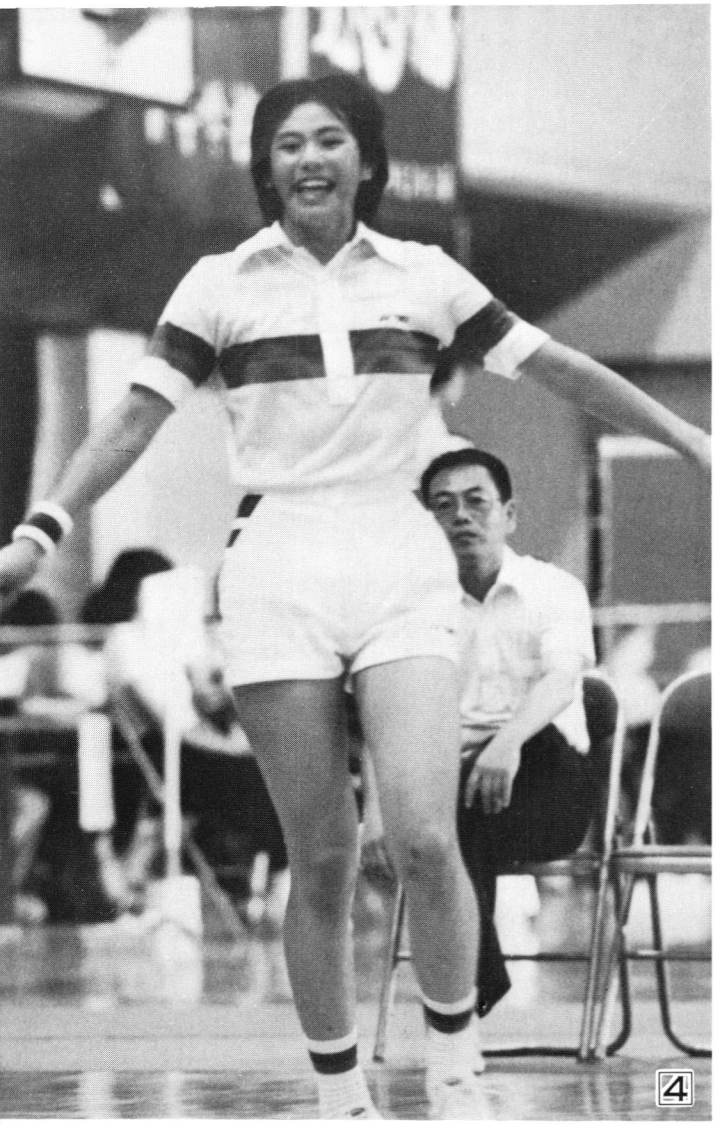
勝者にも敗者にも、それぞれ忘れられない思い出となったことと思いますが、ここに選手の心情あふれるシーンをまとめてみました。若者たちの熱戦のあとを振り返り、明日への糧としてください。

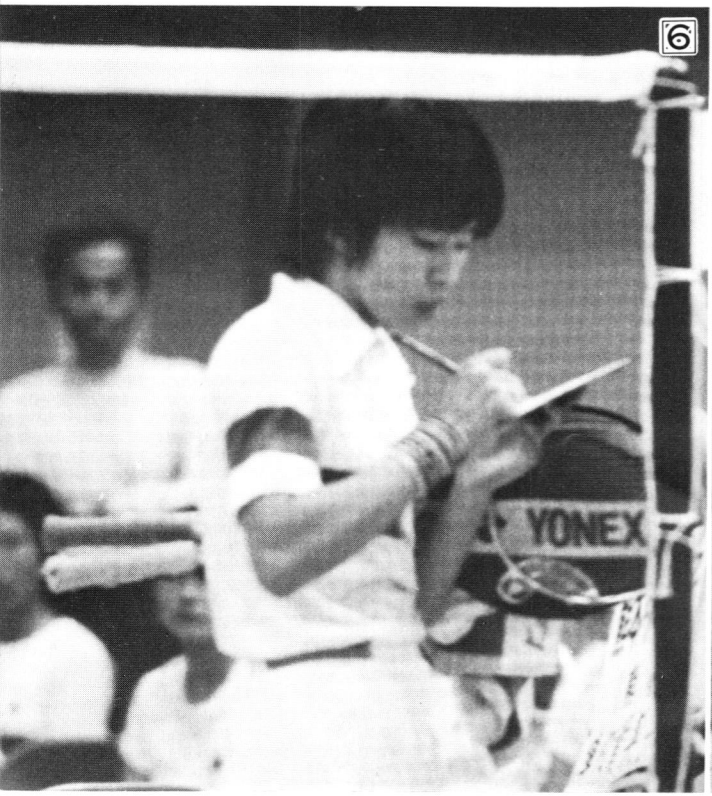
1 細い体にファイトをみなぎらせてがんばった佐藤啓子・藤永由香組（千葉学園）

2〜3 個人戦シングルス準決勝で、強敵・野上満子（新潟青陵）を破った瞬間、高峯和子（熊本中央女）は両手を高々と上げ、体ぜんたいで喜びを表わした

4 2年生ながら、団体戦・個人戦ともに実力を十二分に発揮し、将来を嘱望される陣内貴美子（熊本中央女）のうれしそうな表情

5〜6 バドミントンの勝者はスコアシートにウィナーズサインをし、敗者はラケットをかかえてコートを去る。これほど明暗のはっきりするシーンはない。流れる汗もそのままに、一字一字しっかりとサインする井上哲章（熊本商大付）。後輩・陣内を破ってみごと三冠王に輝いた高峯和子は、まだ喜びの実感がわかないのか、あるいは偉業を達成したあとの安堵感にひたっているのか、ホッとした表情でサインを走らせた


4



6


5

バックナンバーお申込みのチャンス!!

かねてから読者の皆様からご希望の大きかった本誌バックナンバーは、4月号に一覧表を掲載しましたが、多くの人々からご注文をいただき、品切れのものがかなりでてしまいました。そのさい、編集部のミスで、「申込者住所氏名」の欄を落としてしまい、せっかくご注文をいただきながら、お送りできないものがいくつかありました。

そこで、今回整理のついたものをまとめましたので、ご希望の方はぜひお申し込みください。★印のものは在庫僅少のもので、☆印は多少余裕のあるものです。

品切れになるものもあるかと思いますので、お申し込みは、すべて本誌綴じ込みのハガキでお願いいたします。送料は33円～300円程度ですが、編集部からお送りするさいに、専用の振込用紙を同封いたしますので、お手もとに届いてから代金をお振り込みください。

申込シメキリ＝12月10日（消印有効）

バドミントン界バックナンバー一覧表（定価は各300円）

●1977年

★7月号　私のインターハイの思い出　第23回関東高校選手権／日大鶴ヶ丘・巣鴨女高が優勝

★10月号　第20回全日本社会人選手権大会／土田、悲願の初優勝、湯木5年連続5度目の女王　第16回全日本教職員選手権／和歌山、底力をみせ優勝　第3回全日男子オールスターダブルス　日本対カナダ国際親善

●1978年

★1月号　昭和52年度オールジャパン／銭谷Ｖ2、近藤初優勝、飯野・土田組2年ぶり、初栄冠徳田・高田組の頭上

★8月号　関西学生選手権　関東学生選手権　われらのクラブ／ＫＤＤ　一流選手のラケット・アンケート

☆9月号　インターハイ写真集／九州学院チームワークの勝利、四条畷学園強し、小さな大選手・権藤、大型新人・北田

★10月号　インターハイ詳報／九州学院初優勝に輝く、四条畷4連覇　第8回全国中学生大会　第18回西日本学生大会

☆11月号　第21回全日本社会人選手権／ベテラン長谷川、今泉・牧野に栄冠　日韓高校親善競技会　初の世界ランキング

●1979年

☆4月号　舞台裏から見たワールドカップ／殺人日程でも楽しかった＝コーペン　全日本女子チャンピオンズトーナメント

☆5月号　全英選手権大会特集／近藤またしても2位、飯野・土田組高価なベスト4、エピソード・泣くな!!　飯野・土田

☆6月号　トマス杯大会カラーグラフ／インドネシア無敵、復活ハルトノみごとに2勝、恐るべき新人ルイス、プリ意地で強打連発、ここ一番でスミラット活躍

☆7月号　トマス杯大会詳報／インドネシア圧倒的な底力で7回目の優勝、トマスカップ'79こぼれ話、トマスカップ観戦ツアー、トマス杯の歴史、フライング・シャトラーズ、キング・オブ・キングス

☆8月号　全日本実業団選手権／ヨネックス9年ぶり2度目、サントリー4連勝、シルバーボウル国際大会、関東学生選手権

☆9月号　インターハイ特集／今市初優勝、四条畷5連勝、権藤気力の大偉業、北田が独走　第22回東日本学生選手権　関西学生選手権　バドミントンのルーツをさぐる　分析シリーズ

★10月号　新しい黄金時代に近づく中国バドミントン　第22回全日本社会人選手権　第9回全国中学生大会

●1980年

★1月号　第1回日本リーグ特集／ヨネックス・サントリー優勝　第30回全日本学生選手権／中大・日体大優勝　1979年オールジャパン／銭谷・米倉優勝　マスターズ・オープンあれこれ

☆2月号　第2回ワールドカップ／余裕のリム・スイ・キン・コーペン2連覇　大正7年製ラケット発見　全日本女子チャンピオンズ・トーナメント

☆3月号　デンマークのショーマン、スヴェン・プリ　審判なしでもフェア・プレーを　ヨネックス・ウェールズ・オープン

★4月号　中国対インドネシア史上空前の熱戦／リム・スイ・キン韓健に不覚、男子は5－4で中国、女子は3－1でインドネシアが勝つ　第8回高校選抜／今市と熊本中央女が優勝

☆5月号　第2回家庭婦人東京大会　第70回全英選手権／プラカシュ、リム・スイ・キンをストップ、コーペンは圧倒的勝利　第6回日中大会／4年ぶり若い中国が躍動

☆6月号　関東大学春季リーグ戦／ここ一番西山仁王立ち、日体大4年生中心にガッチリ、G&FP賞、リーグ戦いま・むかし　いますぐ入会できる全国30のクラブ　オープン時代2年目へ

☆7月号　第2回世界選手権／カラーグラフ（ハルトノ、リム・スイ・キン、ポンゴ他）、インドネシア勢4種目を制す、全記録　ナショナル・チームはもっと自覚を（小島一平）　第30回全日本実業団／ヨネックス・サントリーが優勝　関東学生選手権

☆8月号　ルディ・ハルトノ・ザ・グレーテスト／3度目の復活の日　関東大学春季入替戦　競技規則一部改正される　ヨーロッパ選手権　一流選手のマイ・ラケット

☆9月号　インターハイ特集／比叡山、熊本中央女が優勝、高峯三冠王の名誉　第10回全国中学生大会／調布四中・信愛女学院中が優勝、個人戦は見市と上村　羽根打ちサービスが禁止になる!?　全日本教職員大会



DÉFI

イタリアからColor Liberation最新版の到着。

新鮮デフィ、新発売。

正統コットンホワイトのぼく。ところが、きょうのパートナーは、イタリアから新着のデフィのポロ。伝統の優れた機能性に、ファッショナブルなイタリアンフィーリングをコーディネイトしたNewデフィとは！ 鮮やかなイタリアンカラーが、ときにローマの華麗となって、ときにフィレンツェの繊細となって、コートを舞った。きみは、コートのウィナーになる前に、恋のウィナーになってしまうぞ。

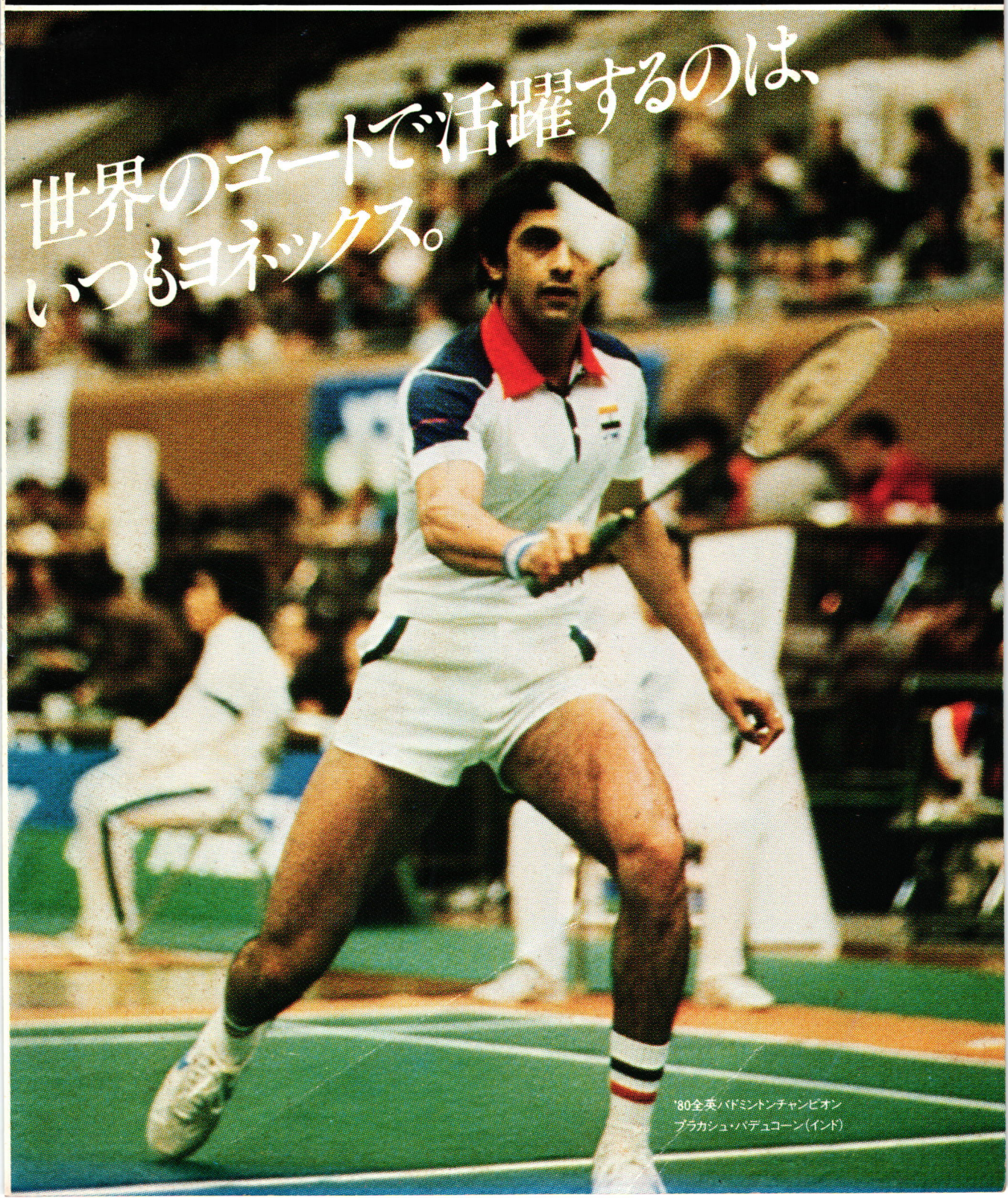
kawasaki

河崎ラケット工業株式会社

今、世界のコートで活躍する一流プレーヤーの4人のうち3人までがヨネックスのラケットで勝利をその手にしています。それはヨネックスの技術の真価の証明でもあるわけです。常に最先端のラケットを作りつづけた歴史の信頼でもあります。たとえばB-8500、カーボネックスは一つの壁とされていた100gを大きく破り、その超軽量と性能のシャープさで世界を興奮させました。バドミントンの未来の先取りです。いま、熱い視線がヨネックスに注そがれています。

YONEX®

世界のコートで活躍するのは、いつもヨネックス。



'80全英バドミントンチャンピオン
プラカシュ・パデュコーン(インド)